WASON
HQ
1104
J74+

May 1893
no. 344

明治廿六年五月十三日發兌

女學雜誌

第三百四十四號

女學雜誌社

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

本號目錄

時事

女學生德育者の謬見○女學校の英語科○獎學金候補者當撰○北海道の女子敎育○カロライン、カーリス夫人

家政

子供に付て(しづ子)○牡丹の花瓣を食用にして貯ふ法○貝類を貯ふ法○魚肉を酢漬にする法○筍を砂糖漬にする法○

史傳

板垣伯、母公の事を話す(門奈矩理筆記)

論說

女子敎育と英文學(仲田誠四郎)

兒籃

黃金機會(中)若松しづ子

小說

春風裡(トオストイ作、不如庵主人譯)

雜錄

端午○男の節句○幟の起原○屈原の事○田家のこよみ○園藝法

摘要

一燈錢申合の事

書架

女子敎訓、道の栞○賢女修身事蹟○消息文典

女報

前號目錄

時事

獎學資金候補者の試驗

兒籃

黃金機會(若松しづ子)

家政

朝貌を種ふるの利益(けい子)
家內重寶錄(海川魚料理法)

小說

春風裡(トオストイ作、不知庵主人譯)

開書

有志の諸姉に御相談の件々一つ二つ三つ(田舍の一女子)

文藝

粢山子廼舍東京社中歌結

雜錄

米國に於ける下婢○今昔物語り(細川越中守の金言○江戸の茶屋○家康の教訓)笑ひ草(地理學の教師○田舍の彗星)

問答

日本全國收穫の米○犯罪者の男女(飲酒者と犯罪者○産婆の敵○醫師の數○電話交換加入者の數

書架

ウエスト女史遺訓○世界博覽會に對する日本婦人○婦人東洋傳道局報告○日本女學史の評○給入幼年歷史○家庭教育、和漢泰西新智夢

隨感

密室默禱(吾等罪あるとを感ぜず、吾等救はれたるとを感ぜず、吾改悔足らず)

史傳

山田米子女史行狀(櫻井成明)

附錄

修正小倉百首

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌 第拾八巻 第三百四十四號
（明治二十六年五月十三日發兌）

時事

○女學生徒德育者の謬見

幼な兒が、其足にて立ち上り、其足にて踏み出し、初めて、「我」と云ふものを知りたる時ぞ、心靈大發達の初歩なるべけれ。身を修め、德を立るの要亦た斯の如し。先づ「我」なる者を見出し「我」の中々に頼母しきとを自認し、茲に、信と望とを得て、初めて、修德の自奮力なるものを生ず。自奮力一と度び生ずれば、枯骨に肉つき、生氣俄然勃發せしが如し。何如なる遲鈍漢も、久からずして、活潑々の德を立つ可き也。

此故に、女學生の德を養はんと欲する教師は、先づ之に自奮力を起さしむるとを旨とすべし。彼等、自から信じ、前途に固く望む所ろあるとを得ずば、何如にして舊習を拂ひ、誘惑に勝つとを得ん。

然るに、今の女子教育者中、女性の劣質を數へ擧げ、其の何如にも頼母しからぬとを揚言し、切りに之を誹りて、扨て、「此故に汝等つとめて德を立よ」とは云ふ。此れ決して德育の方にあらず。工人あり、此の礎もろく弱し、故に此上に大建築を結搆せよと云ふことあらば、何如ん。彼の女性を貶して、而して之に修德を求むるの愚、之に似たり。

○女學校の英語科

女子教育に、英語、英學を過多に用ふるの誤まりは、最早言ふとを要せず。今まにして喋々するは、反つて恥かしき心地す。惟んみるに、方今は、亦た他の極端に走り、英語、英學を、當然の度よりも更に太甚しく擯斥するに至りぬ。過たるは猶ほ及ばざるが如し、之も亦た憂思すべきの事とす。蓋し、新日本婦人の教育に、英學を全く無用なりとするは、前途の大觀なきものとす、識見の短きとを憫れまざる可らず。本號論說欄內、仲田君の文、よく之を辨ず。

○奬學金候補者當撰

米國有志婦人が設けたる、日本高等女學生奬學資金の候補者に對し、去る頃より試驗執行せられたる由は、前號に於て既に報道せり。然るに其后、委員が查定したる所によれば、松

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

田みち子女史第一等の格にて及第したりと云ふ。同女史、履歴の大畧は、左の如し

明治六年より同十四年迄小學校にて就學
同十四年夏期より十七年夏迄京都府立女學校にて普通科修學全科卒業
同十七年夏より二年間京都同志社女學校にて初て英學を修む
同十九年夏より二十五年夏迄横濱山手百七十八番フェリス女學校にて普通科及高等科修學、全科卒業
同廿五年夏再たび京都同志社女學校に入り文學科を修む

横濱フェリス女學校長ブース氏が、委員の問に應じて、同女史が人となりを答へたる文中、左の如き辭あり、

……何等の學科が最とも適すべきやとの御問に對して考ふるに、彼女が天稟と從來の教育とは、共に彼女をして何等の學科にも適應せしめべしと思はれ候。

……其の思想才力等に付きての御問に對して考ふるに、彼女は快豁純潔の氣性にて、其持論は保守の趣きあり。もし主義に關する事など生ずる時は、常に强き確認を現はし、思想は、創思的の方にて、本校在學中、教師及生徒間に甚譽れあり。ことに、思考力深き方にて、もとより年若く才力尚未熟なるうちにも、其思想を日本的に書き現はすの技倆に至りては、著しき才能あり、文想つれに新鮮にして、且つ余情多しと賞嘆さる。小生の見る所にては、御問の如く、「才敏」「鋭俊」など云ふべき質にてはあるまじ、寧ろ理想を確收するに、健全なる方向に於て極めて熱勉し、且つ深く思慮するのたちなりと存じ候。

……本校にては、二三年間、毎週三四時間宛日本歴史及び作文を預科生に教授し居られ候、其間太はだ好結果有之候ひき。

……其性質、確執沈默する所あるにも係らず、人と親しむ事太はだ早し。正義の爲に毅然動かざるの慨あり、不義を惡むこと甚だし。平生無口にして事々しく待せざるに、書生間に於き且つ活潑なる感化力を有し、惣てに尊敬せられ、亦彼女を能く知る人には、切に親愛せられたり。

……小生は、彼女よりも尙ほ爽明俊秀なる女生徒あることを知り居候、然れども其品德の眞實なる、其目的を持するとの熱心なるに至りては、小生が知れる女生徒中、彼女を以て第一といたし候。而して信義、忠實、眞心（Loyalty, faithfulness, Sincerity）などの德に至りては、小生は、何等の辭柄を添しても推薦いたし度存候。

委員が彼女を見ると、大率ね亦右に均しかりしとぞ。而して、吾黨が知れる限りにては、ブース氏及委員諸君が鑑識皆な當を得たり。更に、一事の加ふべきは、彼女が愛國心に富むこと也。事もし「日本」と云ふ事に關する時は、彼女が英氣の數倍するを見る。吾黨は、此氣象ある、女學生が外國行は、頗ぶる健全にして行末賴母しと覺え、掛念なく祝意を寄す。

○北海道の女子教育

植民論に囂々するのみにて、植民の風儀に頓着せざるは、今の時論の通弊なり。多年、北海道開拓に、同じき誤まりを存せしが故に、其惡結果今やすでに顯著となりぬ。見よ、北海道人民の風儀如何に敗れたるや。ことに、其ホームの有様に至りては、聞くに忍びざるものあり。淫風切りに行はれ、戶々清潔の空氣なし。金を以て妻を買ひ、妻は又金の爲に出で去る。もし、姦通を責なば、妻は決して家に留まらずと云へり。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

北海道の婦人の景況は、實に墮落を極めたりと云ふべし。故に彼地の男子青年は、一の理想を有す、曰はく、願くは、内地より操ある婦人を娶るとを得んと。この理想、彼等が唯一つの希望なりと云ふ、何等悲しきとぞ。

左れば、北海道の眞との開拓、今後の眞との改良を圖るものは、彼地の女子が風儀を改たむるを專務となさゞる可からず。之が爲めに、彼地に女學校を設け、婦人會を開くが如き類の事業、太はだ緊要なるべし。在昔黒田清隆氏、開拓使に長官となるや、間もなく、北海道の女子の事に着目し、速かに女生を米國に送りて留學せしめたり。今の大山伯爵夫人、瓜生少佐夫人、津田梅子女史の如き、皆な此時の留學生なり。今にして黒田前長官の卓識を多しとす。

北海道女子敎育の切要なると如此し、何人か奮つて此任に當るものぞ。

某と云ふ、有志あり、北海に、實業的女學校を起さんとて、前年移住し、自から犂鋤を執りて、開拓し、既に三年を經、略ぼ、前途の見込を立てたり。

此頃ろ、佐々城豐壽女史亦た一家を携へて、室蘭に移住せられたり。聞く所によれば、婦人矯風雜誌の編者竹越竹代女史の一家も亦同樣の計畫ありと。

續々として、かゝる實行者の起るを耳にし、前途多望、感謝の念ひ禁じがたし。

○カロライン、カークス夫人

府下永田町に、英國貴婦人の慈善家ありき。上流社會に對する傳道と、下民の仲間に對する救濟と、一汎女學社會に對する少なからぬ助力とを以て、從來しば／＼吾黨をして歎服せしめたり。此人、世に聞えざる多くの善き事を爲せり。其の僅かに聞えたるうちにては、震災ありし節、最先に救濟の事を主張し、且つ非常の盡力を爲したる、又た、日曜雜誌を起して福音の傳播に勞し、德婦美談、その他多くの有益なる小冊子を出版したるなど、殊に人の知る所なり。其精神の確固たる、其信仰の聖淨なる、其風采の純潔なる、ともに人をして、欣慕措くと能はざらしめたり。

此の婦人は即はち、監督派のカロライン、カークス夫人の事なり。夫人、イルフルエンザより餘病を發し、去二十一日、遂に永眠せらる。其臨終の平和なりしは、傍に侍りし人々の

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

感歎する所なるが、夫人、日本傳道の爲に、數多くの經綸を立て、今后晩年に着々其を實行せんとの心構なりしが其達せざりしは、我國に取りて亦遺り惜しきことと云ふべし。

家政

子供に付て

しづ子

我國の人口が年〱増加するものと致ませば、國民總數の中でも一家内についても子供の部に屬する數は成人の部より何割か勝て居る譯ですが、未來の日本國民を薫陶る婦人の役目は實に輕いことでは有ません。東洋も西洋と同じく、社會が天然自然の自由を離れて兎角人工的の虚飾に流れ行升ことですから、理屈は言へず、權理を主張することは知らぬ幼き人たちが迷惑することがどふしても多くある樣に思はれ升。手近かな譬がまづ十疊の座敷、八疊の茶の間、其外書齋も茶席も具はつてある中以上の生活をする家にも子供の部屋と譜つた塲處はない、それ計りでも分つて居り升。それ故子供等は據なく間から間を食客の樣に彷徨ふてありき、あちらへ行つてはならぬ、こゝでも邪魔だと首蠅がられ、落着く處なきはしたものにされてをるが極く〱通例です。母といつては學問のあるものでも其智識を育兒に適用ることは知らず、矢張り昔しから仕來りのまゝを習つて居り升から小猫を育て擧る「プチ」ほどの功も擧らず、成人と子供との間の壓轢はいよ〱ひどくなつて參り升。

迚も今の社會の有樣では理想的充分に此小國民を優待することが出來ません、が同し虚飾的な生活をする中にもなる可く子供の權理を保護し、切めては家の中一室丈も子供等が自由を足す便に備へ、年齡相應の研究も出來、樂しみも盡せる樣にいたし度と思升。左に子供の衣服其他について聊みなさまの御注意を仰度件々を記し升た。

私がある時友人の五才になる女の兒を遊歩に連れて行つたことが有升が、此時此子供の母は美事な友仙縮緬の被布を簞笥から出して子供に着て居り升た。私は子供の手を引て歩いて居り升た間、子供は過つて何かに躓き、前へ轉ぶと共に其被布の袖を少し泥にいたし升た。子供は轉ろんだ痛さには泣かず、汚

れた袂を見ると其まゝ大聲たてゝ泣出して、家へ歸つたらどふぞかあさまにお詫してと聲を戰はして頼み升た。さうして其母はといへば別段嚴しい人ではないのでしたが、世俗の習慣に迫られて據なく小供の自由を防げる樣な長い袖を着せ、小猫や小鳥の樣に汚して差支のない着ものを着せる筈の處を一寸物に觸れても染の附く氣遣ひせねばならぬものを着せて置き、自由に遊べば着物を汚す、汚せば叱るといふ樣な無理の中に無邪氣な子供をそれと見えぬ切苦に逢せて居るのでした。美術と實用と相添ふて行かぬ今の有樣では迚も充分の改良は出來ませぬ。風俗も嗜好と共に行く〲は必ず此二つのものゝ調和を見る時が來るで御座りませう。まづ今の處では筒袖が便利だ、長い袖は手足の發育上に、及ぼして衞生上に不都合だ、序に女の髮の長いも不潔なり、不便なりだといかほど論辨して衣服の新形に心を煩はすものがあり升ても、急に行なはれるとでは御座いません。しかしどふぞ子供丈も發育上に少し注意して遣り度者です。筒袖も赤色の股引三四寸下から出る位の裾短かに着せ、格好の帽子被らせれば男女に係はらず子供は甚ださつぱりと可愛きもので御座い升。嗜好も少しづゝは實用の方に向いて來る樣ですから女の兒にも七ツ八ツまではかふいふ服裝で聊かさし支へないと思ひ升。

次に子供の躾けといふとについて少し申度う御座い升。

○牡丹の花瓣を食用として貯ふ法

よ れ 子

牡丹の花盛りにして瓣の既に落るものを多分に採りて、清水を以て洗淨し水氣を乾かし、十瓣を一と重ねとし干瓢を以て綴り、柚、柑の糖汁（柚又は蜜柑より搾り取りたる液汁に白砂糖を混じたるもの）を以て煎熬して後ち、之を器上に攤げて能く陰乾し、白糖を和して後磁器中に入れ封じ、數月を經て茶食として佳味なり、

○貝類を貯ふる法

よ れ 子

貝類は靜閑なる處に貯ふれば大概四五日間にして死するも、時々驚愕せしむべき暗き場所に貯ふれば久しく生存するものなり、榮螺の如きは人の通行繁き床下などに貯ふれば三四十日を經るも死するとなし、是れ唯好事の談話にあらず、從來淡路地方には專ら行はるゝと云ふ、

○魚肉を酢漬にする法

よ れ 子

酢漬に用ゆる魚類は最も新鮮なるものを要す、是れ魚類は腐

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

敗し易きものなればなり。先づ魚を洗滌し大魚は利刀を以て適宜に切斷し、小魚はその儘にして大小魚共頭及び腸を除去すべし、然る后生肉を磁製の鍋に入れ其肉の全く浸る迄酢を注ぎ爐に懸け、火熱を與ふると暫時にして煮立を待ち熱を止め之を硝子壜或は磁製の瓶中に塡し、而して其煮汁を器中に注入して栓をなし、松脂を以て其蓋に接着すれば直ちに冷室に貯藏すべし、

○竹筍を砂糖漬にして貯ふる法

よ　れ　子

竹筍を砂糖漬にするには、淡竹、苦竹、猫頭竹、大名竹何れも用ゐて可なり、竹筍を皮と共に蒸し而して二日許り乾して后皮を剝ぎ、又數日間日に乾して、米の洗ひ汁に浸すと一夜、稍柔かになりたるものを刀物を以て長さ一寸五分許りに截り、幅七八分に割き濃厚なる砂糖の液汁を以て煮るべし、竹筍は注意して煮ざれば糖分を能く滲入せず、却て腐敗を釀す故に宜く飽和するやう特に意を注ぐべし、

○一夜味噌の製法

よ　れ　子

糯米を炊ぎて粥となし温氣の未だ冷却せざる間に、麴を適宜に加えて攪拌ぜ漸次に放冷し、醴酒となし、而して別に豆を煮て之を臼にて搗き右の醴酒と混和して、之に食鹽を加ふるなり、斯の如くして一夜に製し得ると雖ども、其色白くして毫も赤色を帶びざる故に、該味噌を桶に移して、之を七十五度乃至八十度位の温湯内に入れ、其陽氣にて蒸熱し間斷なく攪拌すべし、斯くすれば其翌日に至り其香味少しも三年味噌と異なるとなし、甚だ好良の味噌を得べし、今其混和物の割合を擧れば左の如し

豆一斗　麴六升　糯米粥一斗二升　食鹽四升

笑ひ草

笑ふべき時あり……………ソロモン。

けふの節句を祝ふとて槲餅拵らへし田舍の老母つぶし餡とこし餡を入れたる二種類にしたりけれど、割つて見ざれば知れぬとこぼしければ、小學校歸りの孫、

おばあさん、それじやァなんか印をして置いたら宜からう。

老母ホク／＼して

ほんにさうだつたな、おめいは學校へ行くから大變と悧巧

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

になつたな、そんならおめい硯箱もつて來て、書てくんな、ナァ、かたつ方にァ、、、あんこのあの字をけいて、かたつ方にァ、、、あづきのあの字けいて置いたら、世話ァなかんべ。

判事
おまへの名はなんといひ升？

若き男
小宮大次郎といひやす。

判事
職業はなんです。

若き男
馬かたでがす。

判事
おまへは矢張り馬かたで、おまへによく似た弟をもつて居升か、？

若き男
○あいさあ死んじやいやした。

判事
死ぬまへには何でした？。

若き男
生ていやした。

ある日擦呉服がある賤からぬ農家の勝手口を覗き込み、下女と見し老婦に、

老婦
一寸、おかみさんはおうちですか？

うちかうちでねいか、眼を開いて見れば好いじやねいかナ、

と突然に怒鳴られて、呉服やは丁寧に腰をかゞめ、

オヤ、それじやァあなた樣が、どふも失禮を申上升て、

おれがこゝの家のかゝあだが、おめい一躰何と見たんだ、旦那と見たか、それとも、隣の人と見たか、それでなくば、日傭取りか、猫とでも見たんか？

と飽まで憎まれ口をきけば、如才なき呉服や

ナニ、どういたし升て、飛んでもない、こゝのお孃さんでも無らうかと存じ升て、

老婦は早速聲を和らげ、ホヽ笑みながら

オヤ、さうかナァ、それなら筋道が分つてるとも。

呉服やはこれよります〳〵甘く取入りて大分荷を輕ろくしニコ〳〵もので此家を去りぬ。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

書架

○女子教訓、道の栞

別に題して、「福羽美靜先生の女德一篇と共刪補になれる後案女大學」と云ふ。之によりて、此書の大躰を推測るとを得べし。野村傳四郎氏編輯し、東京堂より發兌す。

女德一篇の歌は、既に讀みたる人多からん。中に、

誰がいひ初めて女をば　かろしとなしておのづから
物のまなびをなさゞるを　中々、道とおもひけん

の句あり。後案女大學は、貝原先生のを刪補せしにて、例へば、

凡そ婦人の心様の惡しき病は、和らぎ順はざると怒り恨むると、人を謗ると。云々とあるを改め、

凡そ人たるものゝ心様の惡しき病は、道理に順はざると、怒り恨むと、人をそしると。

となしたる如し。附錄は、編者が後案女大學を故鄕の妹のもとに送らんとて書き添たる一文なり。

○賢女修身事蹟

今川應氏編著、中近堂藏版にて、三册なり。古來我國の賢女が略傳に所々畫を加へたり。上卷には、崇賢門院、染殿后明子外、十八人。中卷には、北條時賴の母、長岡宗信の妻、外十九人。下卷には義朝の女、毛利勝永の妻、外十五人を納めたり。

○消息文典

本居宣長翁の高弟たりし藤井高尙と云へる人が著わしたるを、此度び改版出版せしものにて、上下二册あり。中近堂より出版す。文のかき方、近頃に至りていよ〳〵亂れたり。文辭の遣ひ方に誤まり多きは言ふ迄もなし。此書は此等の事を信切に敎へたれば、消息文を學ばんとする人に取りては、近ごろの出版書中、第一に之を推さゞるを得ず。文の書き方はもとよりにて、委細と、こと〴〵と、くはしくと、こまやかとの使ひ分けなど云ふ、文學の用ひ方まで最と細かに說き示せり。

摘要

○一燈錢申合

勤儉は、身を立て家を興すの道なり。近ごろ、世人奢りにすさみ、儉約と云ふとを重んぜず。既に儉約を重んぜずして、而して亦勤勉の念乏しき時は、それはた如何にして立身興家の望を逹するとを得ん。左に、「國光」第六卷第一號に見へたる、一燈錢申合なるものを轉載す。こは、維新の頃名高かりし、松下塾の諸生（即はち今の大臣連多し）が設けたるものと云へり、

此度同社中申合せ自分々々の力を盡し骨を折て鐵細之事ながらも相儲置度事に候非常之變不意之急に差掛り候ても嚢中拂底にては差込ものにて候逐々有志人の牢獄に繫がれ飢渴に逍候ものも相助度義士烈婦の碑を建墓を築等までにも力を盡し手を延ばし度事に候得共同社中有餘の金も有之間敷事に候得ば何れ此方の至誠をのみ貫き度事に候左れば毎月寫本なりともして幾の儲致置度月末松下村塾まで銘々持寄可致候半年にもせよ一年にもせよ塵も積れば山と成理にて屹と他日の用に相立目途も可有之被考候同社中身の膏を絞り出して集る事なれば容易に費すべきにあらず已を得ざる事あれば同社中申合之上にて取捌可申候抑人を救も用に備ふるも富貴長者之事なれば如何樣にも相叶べけれど我々にてかくまでにするは貧者の一燈とも申べき事にて至誠の貫かぬ理はよもあるまじきに依て此度取建ツ金を一燈錢とは名くる也

一毎月寫本六十枚宛村塾まで必ず持寄致置度候事
一寫本數は先師の所定貞字十行二十字五文假奈同斷四文之事
一一日僅に二枚宛之事なれは左まで勉强のならぬ事はあるまじ若此數不定あるときは一枚五文の辻を以相償必持寄可有之候事

右之條々此度申合候處是式の事とへ骨を惜候位にては我々の至誠相貫き候事も無覺束事之樣被相考候銘々屹と怠らぬ樣致度事は申も疎に候已上

酉の十二月朔日　　松下邨塾同社中

中谷　正亮　　佐世八十郎（前原一誠）　　槽崎彌八郎　　岡部富太郎
福原又四郎　　久坂　玄端　　寺島忠三郎　　品川彌二郎
山縣小輔（有朋）　　馬嶋　甫仙　　瀧　鴻二郎　　山田市之允（顯義）
郷　貞五郎　　入江　杉藏　　久保清太郎　　松浦龜太郎
前田孫右衛門　　大樂源太郎　　南　龜五郎

右の外に在江戸

高杉　晉作　　小寺　新之　　伊藤　利助（博文）　　野村　和作（靖）
桂　小五郎（木戸孝允）

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

史傳

板垣伯、母公の事を話す

在高知　門奈矩理、筆記

一と日婦女が我母の話してよといはるゝまゝに其ことを約しぬ。しかるをこよひにいたりこのまどひは女教師共なれば教育のことをもなどいはるれど、此頃は日毎に演説にまねかれ近きうちより咽喉加答兒をさへ起しぬれば多くものいはむもいとは敷まづ一とわたり在しことゞも聞えまし。

我母なる人は窪川の平山内とて土着家老の家に生れ家計最豊かに權力さえ強く何足はぬ事なく生立ちし人なれども學問とてはあらざりし。凡て女の手業何くれとなくものせられ、裁縫髮あぐるなどいと勝れたり。又我父なる人は若かりしより氣鬱の病にかゝり遂に亂心していふ事爲業いとあら〲しかりしが先の妻は女子二人擧させてみまかりける。當時父の物狂敷はいふも更なり父の妹ども數多あるが中に、家を整ふる人とてはなく、ひたすら困じわびて一族とも集ひ語らふに、今こをさめん人は彼の山内の妹ならで他に在すべしとも覺へず、此人を迎ふるの外あらじとて媒もて懇に賴み入れぬ。普通に異なる氣質の母なれば斯く一族より我と思ひての賴默止がたしといはるゝに、親兄弟はかゝる亂心の人としりて嫁すことのうたてさよ、辭することこそよからめなどいさむ。いなとよ宿緣とこそおぼせとて遂に次妻とはなり給ひぬ。凡て兒童の精神を養ふものは女親にぞある。我今日あるも實に母の賜といはんか。特に母の性質としいへば勇氣忍耐慈仁にとみ女子の手工を能くせられぬ。我家に來りて後一女子を擧げらる（これ日野に婚入し其子女は山田の妻なり）この頃父の狂亂いと烈しく常に鎗刀を扱持ち家の周圍を廻り、ある時は側に伏したる母を指さんとして刀は疊を貫きしも幸ひ傷も受給はず脇の下にふれしのみ。かゝる事數度なれば里よりは歸り來ませなど進むれども、元より期したることをとて從ひ給はず、又親族ども打寄父の病痾ゆべしともおぼへねば養生家に入るゝことなど進むるを辭し、妾看護者として嫁ぎ侍るを

今にして生養家に入中さんには病弱増りて再び癒ゆべしともおぼえ侍らず、もし幸なくして命を失ふも憂ふるに足らずとて、能是を看護し給へり。其後予は生れたり。珍らかにも男子とて父の喜びたとふるにものなく、それよりは自ら心和ぎ病弱り詞と行とに違ふふしあるもあら〳〵しきことは消え失せて、遂に五十九といへるとしに、はて玉ひしが、母の看護のいたれるによりて、此齢を保ち玉へりしならんか。

一と日母人もてなしにおひし時、汁の中より黒すき（すきがへし）出たり。私につまみて袂に入れしを主あやしむことみゆ、よりて悉く汁を吸ひ、なほ一椀を乞へりしかば、主おもふこともなかりしとて歸りて語られしをきゝて、姉なる人俄に胸おしゝとて、さきの馳走を悉く吐出しゝに、母人深く戒め喩し、女として餘りに不作法にこそ、他家に嫁ぐ身のさばかりの事堪へでやはあるとて、思の外に腹立玉ひし。又常の敎に、男子は弱きを助くるこそ本意なれ、必ず弱き者をなやましぞ。強き者と爭ふも負けて歸らば、敷居の内に入れまじきぞと、さとさる。霽風烈しき日、友の許より歸り、女乞食の寒さに堪かぬる樣して彳むをみて、汝予に附きて來れよ衣とらさむとて、内に入り、彼方此方を見廻すに、姉人他より歸りまし、ぬぎたる衣をかけてあり。そをとりいて與へんとするに、なか〳〵にうべなはず、聲あらゝげとらするもの取らずやとて與ふ。小僕これをさとり母人に云々と告ぐ。姉なる人しきりに咎むるを、母のいへるは、人としては慈悲の心こそあらまほしけれ、さないかり玉ひぞ、衣をば新に造りえさせんにとて、少しも異るふしなし。母は斯く慈悲忍耐勇氣に富みながら、いたく雷をば嫌はれたり。しかはあれど、予をして見做はしむる事を恐れ、幼き時より雷鳴ごとに、必ず退出され、家に在るを許されず。伯父の許などに至りぬ。其が中にも雷電なりはためく時は、奴僕等もいか斗恐ろしからんとて、勞を自らして下をあはれみ玉ひしが、夕立俄にふり出しぬ。林といへる友と、人の門に雨やどりしてありしに、友のいへるは、某氏の妻は雷嫌ぞと、よいざ驚かしてんといふ。然なりとて、二人共に袂に砂かき入れ、屋根に登り、今やとまつに、すさまじきいなびかりしたり。すはとて上より砂をまきぬ。家内の者ども雷雨に砂のふるよとて、あはてふためきさわぐ。家刀自雄々しくて走り出、其さまを見出し登り來

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

りて友を捕へぬ。予は辛ふじて逃歸り内に入りてみるに、蚊帳をつり、一同其中に靜り居る。是にも一とおはふかせんと、あたりの大そろばんとり出鳴神の音と共に、長き廊下をまろばしたり。女子どもおもひもかけぬ折なれば、そのまゝうつぶすあり、あるはかやよりまろびいで、おそれおのゝきまどふ。苛刻なる伯母在りしが、又例の徒よとてうち腹立、雨もいとはず追來る。漸々にして垣を越逃のび、人の許に一夜を明し、明朝に至り、遙に伺ふ。幸ひ姉人に逢ひ、伯母子はいかにといへば、うち腹立でいます。母御はとゝへば、雷も恐れず徒するは、男子として似つかはしとて、喜び玉へりといふ。母御だに怒り玉はずばとて内に入る。ある時鏡川原にすまひの催しあるに、小僕と共に往きみき東西棧敷かけわたせり。予も登らんとするに、小僕是は各自の造れるにて、人の棧敷にこそ、下にて見玉へなどいふ。おのれ下にて見るものかはとて、歸る。母は子の心の卑屈とならんことを恐れ、夜の間に大工共におふせて、場所はよからぬながら、棧敷しつらい、後の二日快よくすまひみたるなど母の情の深きこと、なか〳〵にいひ盡きじ。幾とせもいませとぞおもふ母親も、予が十三といへるとし、卅七を一期とし、遂になき人となり玉ひぬ。うせ玉ふ三日前の日、手もふるはるゝが中に、なき後の片身の品誰へ、何など、細やかに書殘さる。かにかくと往にしことゞもおもひつゞくれば、子の氣性は大かた母の敎によるならし。よしや、男子の外に在りて道々の事果さんとするも、家を顧りみ憂あらんには、腰折るゝことも多かるべし。彼福島正則は愛女の歎きかなしめるにより、志をかへして、徳川に屈從せしをみても、志られぬべし。婦女の家に對するの務は、男子の外に對するに及ぼすはいふまでもあらじ。男子の功は賢母良妻の如何によると、いふも、誣言にはあらざめり。今の世は、古と異り、世の母たる人外國の事情をも志らで、子を導くことをうべけんや。元より手藝は女子の務なり、なよやかなるは、女子の德なれども、自立の心がけこそあらまほしけれ。されば、とて、僅に外國の風を眞似ぶときは鹿鳴館の例も有べきに、よく心して導き給ひね。

典侍光子

あはれなり我身にちかき鳥邊野の
けぶりをよそにいつまでか見ん。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

論說

女子教育と英文學

沖田誠四郎 稿

人は云ふ我國の女子教育は英語學と其運命を與にするものなりと。是れ單に今より六七年前、天下の人英語熱に狂せる時、女子教育は世の好遇を受け、其後此狂熱の冷却と女子教育の衰退とが其時を同うせし形迹より速斷したる偏見に外ならず。何んぞ知らん、兩者は偶然にして、一時其盛衰の跡を一にせるものにして、決て兩者本來の性質に於て、其消長榮枯を與にすべき主觀的理由ありて然りしにあらざるを。抑も兩者偶然榮枯の軌を同ふしたる所以のもの、蓋し他に二大原因の存するありしによる。夫れ維新後泰西文物の注入と共に漸く其必要を認められたる外國語研究は、偶ま井上伯條約改正事件に遭遇し、伯の有名なる交際政策に煽てられて、端しなくも頓に其氣焔を燃し、疾風野火を追ふの勢を以て、天下を擧て英語熱に狂せしめたり。是より先き、彼の所謂宣教師派女學校によりて紹介せられたる、我國前代未聞の新組織なる女子教育は早く既に世に生れはせしものゝ、育はゞ尚ほ社會の僻隅に蟄居したるものが、今や漸く世の認むる所とならんとするの時、恰も好し俄然英語熱は狂騰せり。斯の如くにして兩者偶然にして其時を同ふせしこと而かも兩者共に我社會に新奇の事物なりし事、是れ第一の源因なり。次に天下の大勢未だ英語研究に傾かざるに先ちて、既に宣教師派女學校は主として英語を以て重もなる學課を授け來りしが、今や英語熱の發現に際し、相待て互に其勢焔を助けしと、是れ第二の源因なり。夫れ新奇なる事物は、能く世人の注意を喚起するの力あり。蓋し人は新奇を喜ぶ、換言すれば、好奇心に富むの動物なればなり。故に、只その新奇なりと云ふの一事、能く世人の耳目を眩惑し、其理性の辨識力を盲殺して、一時其聲望を維ぐを得るものなり。斯の如くして其聲望を維き得るの間は、人の好奇心活働の時期なり。乃ち六七年前の當時は新事物の新奇に惑はされて、好奇心獨り人心を横領したるの時、即ち人心變態の時期なり。常經を以て律すべきにあらず。四五年來好奇心漸く飽き、人心茲に漸次其常態に復せんとす、此の機に乘じて、天下を風靡したるは、保守、國粹の聯合軍なり。夫の搖鐘の中點に止まらざる如く、人心は一の極端より歸り來りて、其中庸に止まるものにあらず。反動の勢力は、世人を驅て他の極端に到らざれば止まざらんとす、保守の極端改進の極端其間天淵の軒輊ありと雖、共に其理性を盲殺するは、乃ち一なり。是に於てか、世は一變して國文學の世となり、再變して漢文學の世となり、憐むべし一時天下を横領せし英語學も、今は日影の身となりて、之を學ぶもの、之を語るもの、肩身の狹きを覺ゆるの心地すと云ふに至りては、如何に榮枯不定移り行く世の習とは云へ、其變遷や極まれりと云ふべし(女子教育の盛衰に關しては別に說あり茲に說かず)此の逆へ難き大勢は、氾濫して遂に我女學界まで浸蕩し、概して全國の女學校脆くも此大勢に打負けて、斯こに爭て大に英語教科書を減廢せり之れ大に甚し、左れど之と共に純然たる英語英文學課さへ大に之を減却し、若くは、之を全廢し、以てひたすら世人の意を迎ふるとを是れ力むるに到りては無見識の譏を何とかせん。兎に角、予は確かに、近時概して全國の女學校(公私を問はず)に於て、大に英語學を輕視する傾向の顯著なるを認めて、心竊に其意を得ず。左は云へ、予は決して和漢文學の必要を否認して、漫に外國語學の効能を唱導するの愚をなすものにあらず。見よ、和漢文學の要と効とは、人既に說き盡して、復た加ふべきなく、且つ之を奬勵するの道も亦た盡し得て寧ろ過ぎたるの恐はあるも遺憾なし、何ぞ贅說を須ひん。只かの英語學に至りては、寂として復た人の說くなし。女子教育と英語の問題に關しては、予豫てより聊か說あり。是予が四顧反動の逆勢中に立ち、その信ずる所に頼り、敢て女學生に英語學研究の必要を說き、且つ孜々として之れが奬勵に怠らざりし所以なり。近時我社會何となく英語學復興の兆あるは。世人も予と共に之を認めん。然らば、他の說くを待たずして、或は遠からず我女學界に再び英語學流行の日を見るを期すべきか。予は、早く既に今にして其傾向を認む。稍祝すべきの現象に似たりと雖も、尚ほ大に憂ふべきものあり。そは他なし、夫の漫に「大勢に循ふものは榮へ、大勢に逆ふものは亡ぶ」又は「聖人は能く世と推し移る」等の古語を服膺してか、何の譯もなく、只だ世の大勢なるが故に、之に循ふ。是れ予が大に取らざる所なり。若し果して之れを學ぶの價値なしとせば、世の大勢なればとて、何んぞ之れを學ばん。若し又た果して之を學ぶの價値と効能ありとせば、何を苦て世の大勢なればとて、何んぞ之を學ばざらん。宜しく其確信する所に從ひ、斷々乎として之を

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

取るべし。要するに、取捨一に確乎たる理由に基くべしとは云ふなり。予は社會の大勢をば度外に舍き、種々の方面より考察して、深く其必要と効能を認め、且つ之を學ぶに十分なる理由あることを斷信す。是故に、左に、予が所信を表白して、敢て大方識者の示敎を待つ。

(一) 英語の事を論ずるに先ちて、先づ知るを要するは、國語としての英語の勢力の一般なり。世の人動もすれば、餘りに自國語を偏重するの極、外國語を輕視するの過に陷る。吾人は自國の國民たると同時に、世界の一民なることを忘るべからず。思想をば世界の局部たる自國の中に限りて、自ら耳目を塞ぎて、世界の事を知らざらんとするは、自ら立ち、且つ世界に交るの道にあらざるなり。夫他と交らんと欲せば、先づ自己を知り、併せて他を知るを要す。他國の語を學ぶは、他國の民を崇拜するの故にあらずして、其民の位置、品位、實力、特質を知る所以の道なり。又吾人は、其友と交り、其交際よりして、我智德修養の上に利益を得んが爲に、其友の品性特質實力の短所長所を知るを要するが如く、又た外國の民と交りて、其民の特質實力の長所短所を知るを要す。而して最も正確に之を知るの方法は、其國語によるに如くなきは、言を待たず。萬國は廣し、國語は多し、一人にして萬國の語に通ぜんことは、望むべきにあらず。是に於てか、撰擇の要起る。先つ試に文明の三大國語として世に持囃さるゝ、英、獨、佛の三國語に就て、考察せば三者各特有の美を有するは、論なきことなれども、其世界に對する勢力の上より見て容易に其間霄壤の差あるを發見せん。試に此一世紀間に、右三國語を用ゐる人民の增加せしこと英は、實に其八倍、獨は一倍八分、佛は一倍二分强に達せり。而して現今の總數は、英は實に三億五千万、獨七千万、佛四千万餘なり。尙此勢を以て進歩するものと假定せば、今より六七十年の後、英語は實に全世界の人口を橫領するの割合なり。人是に至りて、英語の勢力の豫想外に驚くべしと雖も、たゞ一の英語にさへ通ずれば、世界の要地到る處用を辨じて、餘りありとの事實は、世界漫遊者の共に認めて驚く所なるを思へば、敢て怪むに足らざるなり。さても、「アングロサキソン」語の將來ほど、世に恐ろしきものはなし。又次に學術上、文學上、苟も世に一讀を値するの書にして、先づ英語に譯されざるもの、殆ど稀なり。蓋し英語は各國語中最も普通のものなればなり。故に曰く、英語は万國思想の寶庫なり、又た關鍵なり。一以て万を兼ぬ、其價や思ふべし。是れ他の國語に卓越して英語の重寶なる所以なり。

(二) 輓近、保守的思想天下を風靡し、其弊毒深く人の肺肝に入り、前途多望必ずや當さに氣象宇宙を呑み元氣天を突くの慨あるべき我國民にして、一朝保守の妖霓に魅られ、忽ち老餘の廢人と化せんとするを見て、予は悲歎すべきの顯象となす。夫れ今日は實に日新の世の中なり。一日苟偸せば、一日時勢に遲るゝの世の中なるを記せざるべからず。吾人は、銳意、新知識新文明を追求して、進歩の途上に歐米万國民と、英を競ふべきの責あるを忘るべからず。左れは、保守の思想、一時如何に其毒焔を逞くするも、文明の大勢は遮ふべきにあらず。何時までか、斯てあるべき。予は信ず、今より二十年の後必ずや我社會は、其面目を一變し、其軒輊や維新前と今日の差よりも甚しきものあるべきを。若し我女子敎育の目的をして、田夫野人の妻母を出すに在らしめば、去來知らず、苟も國家の腦髓柱石たる中等社會の妻母を養成して、社會の根底より改革せんとの望ならしめんには、先つ今後の中等社會を思はざるべからず。如何に非外國語說、援を國粹主義に假るも、万國語中最も世界的たるの資格に富む英國語は、必ずや大勢に連れて我中等社會に持囃さるゝや豫想するに餘りあり、人自國の語に暗くして、却て巧に外國語を翻弄す、是れ恥ずべきのことなり。左れど既に自國の語學に通曉して、傍ら外國語を兼ぬ、啻に恥辱ならざるのみならで、其の「タシナミ」の稱感すべきなり。是故に歐米中等社會以上の婦人、多くは自國語の外、數ヶ國の語に通し、却て其の能はざるを以て恥辱となす。其樣殆ど外國語の知識を以て文明婦人の資格の一と心得るものゝ如し。假に世の論者に數步を讓り、實用の點より見て、餘り効用なしとするも、予は文緻の上より見て、大に其必要を認めざらんと欲するも得ず。

(三) コンコルドの哲人エモルソンは云へり、「神の神たる有用にあり、人の人たるも、亦有用に在り」と。而して、人をして有用の器たらしむるは、敎育の任なり。乃ち知る、有用の敎育唯一の目的なることを。有用なきの學問は、行を乖れざる信仰の如し。今の人、口を開けば、輙ち曰く、實用、實用と。誠に吾し。學問の實用を重んずるは、云ふ迄もなし。左れど、有用と實用とは、混同すべきにあらず。實用は有用の一種の形に外ならず、人は實用の外に有用なる能はずと云ふは、四肢五躰の外に、人なしと云ふに異らず。人は器械的に世に實用なると同時に、精神的に、品格靈德理想等を以て、人類に有用なるを得るを忘るべからず。故に曰く、有用は敎育の唯一の目的にして實用は敎育の主もなる目的なりと。夫の餘りに實用を重んずるの極、終に實用の外に學問の要なしと云ふは、實用の外に人なしと云ふに歸す。實用の外に人なしと云ふは、万物の靈長たる人間を、純然器械視するものなり。人の人たるは只世の器械たるのみに在らずして、眞に其高尙微妙脫俗の靈性に在るを忘るべからず。人天賦靈活の身を以て、自ら卑て器械たるに甘んじて、人間の能事終れりと爲す、誠に靈性の賊と云ふべし。然らば、人は實用の爲に學ぶと同時に靈性の爲に、理想の爲に、學ぶ所なかるべからず。而して、其靈性理想を脩養するの道、一にして足らずと雖も、予は其一として、英文學の甚た有力なるを信す。英文學が吾人の靈性理想感情を健全高潔ならしむるの効に至りては、實に驚くべきものあるなり。是れ予が一家の私言にあらず、世の識者の共に承認する所、其の何が故たるやは、今論ずるの要なし。今只其結果に就て言ふ。予は靈性、思想、感情、此三者の修養は吾國婦人に取りて、何よりも大切なるを認め、且つ次に論ぜんとする婦人の境遇を考へ、彼等の昔き敎へ手慰め

手として、何物よりも先つ英文學を推薦す。

（四）最後に最要の理由を擧けん

夫れ、女學生は、學校に在るの間、諸般の學問を學ふ。その之を學ふの目的は要するに日常生活の上に於て、子女教養の上に於て、缺くべからさる普通の知識を得るにあり。此目的を以て、彼等は天文學を學ふなり。動植物、理、化、經濟、社會、其他幾多の學問を學ふなり。實に是等の學問か教ゆる普通の智識は、皆實用の効あるものなり。故に、「婦人に學問は要なきなり」との、目下流行の頑見には、予は此點までは、全然反對す。左れど、此に一の考ふべき事あり。見よ、彼等か一旦業を卒へて世に出るや、身は一家の母として、百般の家事絶へず、身邊に蝟集し、加ふるに、家庭の責は殆んど全く、彼等の手を待つ、斯の如くして始めて、彼等は學校を出でゝ後ち我は何われは何と、嘗て其勉强を期せしことの空想なりしを悟るなり。然り、實に、彼等の職掌は、彼にありて、此にあらざるを奈何せん。左れは、彼等が一家の母となりて、后ち、彼等か嘗て其梗概を學ひたりし學問を、尙深く修めんなどは、中々に望むべきにあらず。極論と聞へんかは知られど、思ひ見よ、天文學の研究は、天文臺を要するなり。理化學の專修は、實驗室、器械、藥品を要するなり。斯かる巨多の資本を要するのことは、普通の家にては、到底許さるべきにあらさるなり。且つ思へ、今日は、日新の世の中、今日の新說、忽ち明日の陳說となる。此急進の思想界に立ちて、日新專門の新智識を追躡せんなどは、一般婦人には、思も寄らぬ業なるを。又假りに之を爲すを得たりとするも、家庭の重責を負ふ身を以て、之を捨て、彼に從ふべきにあらざるなり。人の心意は、万能にあらす。一方に偏すれは、一方は必す等閑となる。左れは如何、日常普通の顯象を解釋する丈の學問上の智識の必要なることと、之か其子女教養の上に及す効益の漠大なることとは、今更論する迄もなしと雖とも、探く專門の領分に入りたる高等なる科學上の智識は、餘り婦人（少數の特例を除き）に益なきものと知るべし。今此に比較して、學校にて學ひ得たる高等なる英語英文學の實用を問はしめよ。若し彼等にして、學校を出る時迄に、十分に英語學の智識に進み、師の助に賴らで、能く自由に大抵の文學書を繙き、稍其其趣味を解する丈の好尙を備へたらんには、彼等が家族を作りし后も、家事と家庭とに繁忙なる問に於て、何の準備も要せす、又格別の資本をも要せす、時に健全なる文學に就て、健全にして無害なる娛樂を享るを得るにあらずや。其形の如何を問はず、兎に角に娛樂の人生に必要なるば猶ほ睡眠の健康に必要なるか如し、是れなくば、將に彼等は家事の俗了する所とならんとす。何によりてか、彼等か煩雜なる家事俗務の爲に忙殺せられたる彼等の思想を養ふべき、又何に資りてか、其靈性理想感情の修養を爲すを得ん。心を靜めて善く思へ、如何に家事は、婦人天賦の職掌なればとて、終始之か爲に忙殺せられんとは、致し方なきとして、傍觀せん事は豈に人の母として、人の妻として、婦人を重んずる所以の道ならんや。況んや婦人を輕んずるは、取りも直さず、自らと其子女を輕んずる所以なるをや。實に婦人か終始俗事の爲に俗了せられんことは、立派に人の妻として、世間の家族の模範となり、立派に人の母として、多くの子女の師表となるの責ある人に望ましきことならんや。夫れ、文學の目的は、健全なる娛樂にあり。健全なる娛樂は、特に婦人の生涯には、最要の滋養物なり。況んや婦人の裏性は、假令へ自ら創才的文學者となるには適せずとも、文學を喜ひて受くるの顯著なる傾向を示すに於てをや。乃ち、その喜ふ所に從ひて、娛樂の道を備ふ、その健全なる感化を與ふることに於て成功すべきや期すべきのみ。予は此點に於て特に英文學の最も有力にして、而も適當なるを信して、疑はず。乃ち予は、婦人の境遇の如此きものあるを思ひ、且つ其高尙純潔なる思想を養はんか爲に、之に健全なる娛樂の道を與ふの必要を認め、乃ち、女學生に英文學講究の必要を主張す。

斯く論すればとて、英語教科書により普通學を教授せんと說くものなりと、予を誤想する勿れ。此事の不必要にして、而も、不都合なることは、人既に說き盡しぬ。且つ今日にして、尙斯の如きの愚を學ぶ當事者なきを信ず。予の說く所は、要するに、只普通學を授くるの傍ら、別に先つ英語學を敎へ、進みて英文學に到らんと云ふに在り。又、予は、普通學其他婦人に必須なる藝術の學習に、損減を加へて迄も尙英語英文學課の設置を冀ふものにあらず。只、予は、實驗の上に於て、敢て寸毫も、此等の憂なくして、授業の方案により、一週僅少の時間を以て、優に之を習得するの餘裕あるを認めたるか故のみ。而て、其教授の方案に到ては、予別に說あり、今は說かず。

以上予か、女學校に英語英文學の必要を主張する理由なり。所論錯雜を極め、所思十一を盡さずと雖も、又以て其梗概を見るに足らん。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

兒藍

黄金機會（中）

若松しづ子

私は此時母の前へ此三ツの貨幣を置いて其廻りをトン／＼踊り廻つたのを覺へて居り升、「金の機會に、銀の機會に、銅の機會だ」といつて。疲れ果てるまで跳びまはり升たあとで、フト思ひつき、母に貰ふた甲斐絹の切で三ツの袋を拵らへに取り掛り升た。これは何が爲なれば、其貨幣を入れる爲で、それを一ツつゝ形に合せて丸く縫ふヿと大白の糸で口をくゝるヿなどに容易ならぬ苦心をいたし升たヿもハッキリ覺へて居り升。さてまた此大したお金を何ぞ善いヿに遣ひ度と思ふにつけ、さき／＼の考が胸の中に浮んで來升たが、何れも夢か幻の樣な空な考へでした。しかし前日の母の教へを記臆して居り升たから、まんざら吾儘な慾張つた樣なヿは其中に有ませんかつた。

翌日は半日のお稽古で歸つて來升と、父が下町へ行くから一處に連れやうかといはれ升た。父と下町へ行くのはいつも私の樂しみにして居たヿで、此日もかふいはれると嬉しくて堪らず、父の手に引れてイソ／＼出で行升た。父は銀行に用があるので、濟まで待つて居る樣にといつて、出入の仕立もの する女の家へ暫らく預けられ升た。平生田畑の青／＼した氣色計り眺めて居るものが折々賑やかな都へ出るヿですから見るものが珍らしく、小さな魂はみんな眼一ツへ集つた心地がして居り升た。

仕立やの隣りには此邊にて余り見ぬほど立派な西洋小間物を商ふ家があり升たが、例のシャツ、靴足袋、襟捲などが華やかにブラ下つて居る中に、子供の眼につく美麗なおもちやが澤山に飾つて有升た。私は知らず／＼隣店の方へ首を伸し、頻りにそちらへ氣をとられて居るのを見て、仕立家の主婦が

お孃さま、おとなりへ入つして御覽遊しまし な。

行つても好いの？

宜しう御座い升とも、御覽遊したら、其先へ入つしやらずと、直ぐお歸り遊ばしまし、さう遊ばせば、何にもわるいヿは御座いません。

私は外へ行かぬヿにシカト約束を諦めて、二足三足歩むと隣

りの店の前へ參り升た。私は此時心の中に此店の主人ほど羨しい人はないと思ひ、あんなか愛い人形を棚へのせて構ずにゐられるとは不思議な人、わたしならばあの人形、あのゴム鞠、アレあの異人笛、どふしてあゝして飾つて計り置かれやふ、おまけに人がお金を出したとて、どふして手離すとが出來るだらうと思案いたし升た。私はまばゆい程華やかな店先に佇んでトント夢中に見惚れて居たものと見へ、店の主人が近よつて聲をかけ升た時ビックラし升た。

孃さま、おはいりなさいまし。

聲を和らげ、微笑をつくつた其様子を見て、マアなんといふ深切な人だかと嬉しく、早速敷居を跨ぎ升た。主人はいよ〳〵笑顔になり、

孃さま、何がお眼に止り升た？何ぞお買ひなすつて。

といひ升から、知らぬ店へ立寄るは物を買ふ爲でなければならぬのに、ウッカリはいつてと始めて氣がつき、我知らず顔を赤らめ、やうやく

いゝへ、なんにもお買うのじやないの。

それはどふも、イヤナニ此人形や風琴はツイおとつひイギリスの船で揚り升たものですから、丁度好い處で、へイ、なんぞ御意に入つたものは御座い升まいかナ、ナニ十日もたち升とみんな賣切升からナ。折角お出ですからなんぞ……

と頻りにしやべり立升た。私は其言葉を一々聞とり。

オヤ、さう、みんな賣れつちまふの？みんななくなるの？

と眼を丸くしていふと、主人はまじめに

左樣ですとも、モウいまにどん〳〵買においでなさい升。見る中になくなつてしまひ升。

いひながら側にあつた小形の風琴をとり、兩手をかけて引き伸すと雜作もなく「てうちよ、てうちよ」と何ともいはれぬ面白い調子に鳴り出し升た。私はあつけにとられて、聞惚れて居升と、主人はます〳〵得意に商買口をきく、見たり聞たりして居る私は兼ての決心も何もかも忘れ果てゝむやみと風琴が欲しくなり、見てとる主人は花主を逃さずとう〳〵賣つけてしまひ升て、新聞紙へ包んだ風琴を持つて其店を出升た時は、巾着へ納めて懐へ入れた大事の〳〵金貨がチャント人手に渡つてしまつて居り升た。

私は父と家へ歸りしな、此風琴の彈易ひとを父に話し。

とうさま、兩方の手に持つて引張つたり、縮めたりしさへすればよふく鳴るんですよ、易しいの、いつでもおとうさまにひいてあげ升よ。

といひ升たが、父は銀行へ行つた用事のとでも考へてか、墓〱敷く返事もして呉れませんかつた。家へ着き升と母は他出して留守でしたから、早速祖父に見せますと、これも別段よく買つて來たとも、わるかつたともいわず、善根を蒔く爲につかわふといつた言葉を無にしたといつて驚ろく樣子も有ませんでしたが、さりとて私は心の中に何となく咎められてソロ〱風琴を買つたとが嫌になつて來升た。何はさて置き、おもちや屋の亭主がした通りを眞似て、引て見ても縮めて見ても、どふひねくり廻しても「てうちよ、てうちよ」のふしは出ず、よつて此時始めて悟り升た、此風琴も琴、三味線同樣、一〻人に習わなければ何のふしも出せないといふとを。耻しさと口惜さに二階の暗がりで風琴を前へ置いて泣いて居り升と、母が丁度歸つて來まして、此樣子を見てビックリし。

　おまへどふおしだ？

私は母の顏を見ると一層激しくシヤクリあげ、

アノ………アノこんなもの買つちまつたの………彈けも何もしないものを………モウ黄金………黄金機會がなくなつちまつたア――

と喚き立升と、母は

　オヤ、モウあの金貨をつかつてしまい升たの？長やの捨坊を學校へやる筈ではなかつたの、あのお金があれば、半年學校へやれるつていつて聞かせて上たでせう。

私はまた新たに泣始め升た。母は私の側へよつて手拭で私の涙をぬぐひ

　おまへモウ買つてしまつたのだから仕方がないけれど、よく考へて御覽なさいよ。おまへも善い事をし度とおもわないではないが、一生懸命にならないからいけませんよ。それが熱心でないといふのです。誰でも善事をし度ないとおもふ人はないが、本氣になつて、一心にそれをしようと思ふ人と好加減に上つらでし度と思ふ人とで大變な違ひになるんですよ。おまへは子供にしては余程のお金を持つて、それを善い事につかへば、大層立派な行狀が出來たものを、大切な機會を外しておしまひだつたよ。

私がじつと聞いて居る處見屆けて、母はまたあとをつぎ、あのお捨坊を半年學校へやつて御覽、それこそあの兒の爲にどの位結構なとだつたか知ませんよ、第一讀書のとも少しは覺へられる、また色〱身の爲になる結構なお話しもきける、あの兒の一生にどの位利益があつたか知れませんよ、さうして其立派な善行を行ふ機會を何ととりかへたかといへば…………

私はこれまで聞いてモウたまらなくなり、

私が大へんわるかつたんですから、かあさまどふぞ御免下さい、買ふつもりでも何でもないんでしたもの、あの人が彈てるの聞いてたら、みんな忘れつちまつたんです。知らないで、ウツカリ買つちまつたんです。モウ決してこんな事しませんネイ、かあさま、モウおもちや屋なんかへ行ませんよ。

オヤおまへおもち屋計りが決心の忘れ處だとお思ひか、氣をつけないとまだ他の處で幾度かこんなとをし升よ。

淚を流さぬ計りの母の言葉を聞升て、私もとも〱悲しくなり、

かあさま、それでは私はモウどふしても善いとは出來升まいか、私が何か善事をしよふと思ひ升と、いつの間にか外の考へが來て邪魔をして居升もの。とうさまが私のとを棒ふらの樣だなんて仰るんですもの。

おまへは決心をしてそれを爲遂げるとの六ヶ敷方には違ひ有ません。それが爲におまへもいかい苦勞をおした、わたしも中〱はたで氣が揉め升。しかしまた少さいにしては感心な處も有升。それはおまへを高慢にしよふ爲ではない、余り氣を落さない爲に話して聞かせて置升。

かあさま、それは何ですか早く話して頂戴。

ナニネ、おまへが眞實善をし度と思ふ心根です。たとひウツカリ忘れて、ずるに諦めたとをせずにしまふとが有ても、又思直して新らしく決心をするから、それが一ツ取どころです。だん〱其忘れる僻を矯め直して、心を落着け、恐れ多いとですが、總べて聖き御心のまゝに治めて入つしやる御神の見まへと思つて專心する樣にしたら、キツトしまいには思ひ通り出來る樣になりませう。

かあさま、本統に仰る通りですよ、此風琴を見ると心地が

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

わるくなり升から、たゝんでしまいませうチかあさま、といつて、此時涙を拭ひながら其おもちやを片づけ升た。銀貨と銅貨はまだ殘つて居り升たが、黄金機會はモウおしまいでたし。

此次は銀と銅の機會を私がどふつかつたかお話しいたしませう。

雨風に花は跡なく散りはてぬ、
おなしき枝をかたみさは見よ。

小説

春風裡

其三（下）

トオストイ作
不知庵主人譯

自分はマカァの許へ行くとマカァは果して自分が推察通り熟睡してゐらぬ由を辨じ、自分は漸くほッと息を吐き、セルギイは再び父親の如き調子と態度に復した。然したッた數分時前の言葉を耳にした自分は中々其調子と其態度に欺される事はない。で、マカァが男が『戀』を發言すべき者で女は兎角に謹むが嗜であると云ふと、

『左うでない』とセルギイは辨折した、『どうしても男が戀してゐる事を自分で云へぬ時又は云ふまじき時は隨分あるもんだ』

『何故です』と自分は反問した。

『ひよッと男がそンな事でも云はうもんなら人は誰もおかしく思ふからナア。眞面目くさッて「貴孃に惚れました」と云ふ男は自分で自分を欺くばかりか、他人まで欺く輩だ』

『そイぢやァ貴所、男の方が何とも仰しやらなけりやァ女には惚れられてゐるンだか如何だか分りやァしませんワ』とマカァは云ッた。

『そンな事ァ知らん。しかし情といふ物があれば口へ出さないでも分るもンだ。私が小説を讀ンだ時思ッたチ――ストレッツキイがエレノオラに向て「私は貴孃を愛します」と云ッた時の馬鹿さ加減と云ッたら實に無い。何もどうの斯うのと

いふ譯もないが一段人間の格を落す樣な氣がする』

セルギイが心中の感情を包み秘さうといふ容子はありありと自分に知れたが、マカアは非常に驚歎したらしく、『本統に偏屈な事ウ仰しやるよ』と詮方なき躰で、『だがセルギイ樣、貴所は本統に女の方に向て戀してゐると仰しやつた事アありませんか』

『勿論有りません——私は女の前に腰を折てそんな卑劣な事ウ云つた覺えもなく又云はうとした事すら無いネ』と元氣よく答へた。

『云はないだッて好いワ』と煖窖の事を臆出して自分は心中に思ッた、『云はないだッてあたしに戀してヱるのは分ッてる…………いくらごまかさうたッて無益だワ』

其晩セルギイは自分と少しも言葉を交へなかッたが、其言葉の末に又其起居の端に又其瞥見の間に渠の愛念を認める事が出來る。唯自分の疑念を起さしめたは、一度其意中が口頭に發すれば萬事悉く良果を結ぶ事燎然として火を見るよりも明らかなる此時機に際し、何故にセルギイは殊更に戀慕の情を秘し荐りに冷淡を粧ふに勤むるにや、是ばかりは自分大に訝かしく思ッた。且つ一面より考ふれば渠と一緒にならんとて煖窖に飛込みし自分の擧動は餘りに輕忽無謀にして或は渠れセルギイの憤怒を買ひしにあらざるかと懸念した。

茶が濟んでから「ピヤノ」の方に行くとセルギイは自分の跡に從いて來て、

『何かお彈きナ、カシヤ。此間聽いてから大分久しくなるネ』

『ねヱ、貴所』と自分はじッとセルギイの顏を見て、『貴所、怒ッてゐらッしやるノ』

『何故？』

『何故ッて、今日は貴所の云ふ事を聞きませんかッたもの』と自分に顏赤らめながら答へた。

漸く渠は合點した躰で、首を振り莞爾笑ッたが、其笑の中に一度は自分を叱らうとしたが今は既に過去ッた事であるといふ意が含まれてゐる容子は自分は悟り、

『そイちやアもう過ぎた事ッたから再た仲を善しませうネ』

と、「ピヤノ」の席に坐しながら云ッた。

『左うだ、仲よくしやうよ』と渠は云いた。

「ピヤノ」の臺の蠟燭は一道の光を放て此天井高の座敷を照

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

し、僅に其周圍を輝かすのみで四邊朦朧として仄暗く、夏の涼風はソヨ〳〵と窓に通ひ、部屋を上下するマカアの規律に協つた足音と、主人セルギイを待兼ねて土を蹴る馬の蹄の音の外は、萬籟死せるが如く闃寂としていた。

セルギイは自分の背後に座を占め、自分は見る事が出來ぬが、慥かに「ピヤノ」の調子で充渡つた此暗澹たる中に默座せるを認識して、其擧動から其面地まで歷々として心に刻み込まれた樣で、自分はモザルトの『フハンタシヤ、ソナタ』を彈じ、實際はセルギイのことばかり考へて心は全く音樂に有らざりしが、慥に自分は巧みに彈じて頗るセルギイを滿足さした事と信じ、何でもセルギイは自分の彈琴の妙なるに感じ自分を一心に凝視めてゐる樣に思はれ、心にもなくうッかりと壓板に指を觸れたまゝ顧眄くと、セルギイは窓側に立ち前額に手を當てゝじッと自分を凝視め、目と目が衝突ッて互に微笑し、自分は琴の手を休めると、渠は打笑みながら頤で樂器を指して自分が休めたのを呵責するが如き躰で、自分は再び彈じ初めると、恰も此時月は中天に上りて窓にさし込み、銀色の光を部屋一杯に張らした。

マカアは此時歩を留めて自分が怠けながら彈ずるを叱り、セルギイも全じく自分の彈琴は頗る巧妙ならぬ由を云つて、此月のさし込む部屋から暗き部屋へと運動し初めた。

しかし自分は何だか嬉しくて仔細もなく可笑しくなり、マカアの首にかぢり附いて其咽喉に接吻し、セルギイが來ると直ぐ面目にすましてゐた。

『今日は本統に如何かしてゐらッしやるよ』とセルギイに向てマカアは云ッた。が、セルギイは返事もせず唯自分を一瞥して笑てゐた。

『好い月夜だナ』と渠は云ッた。實に此夜は格別の好天氣で、大空は晴渡ッて一點の雲もなく、月光及ぶ限りは公園の立像も物見の臺も黒き蔭を殘して他は一面に漫々たる白銀の波を漂はすが如く、遠き丘陵森林は朦々たる靄に包まれて、近く右手の白楊樹は微風に乘じ今や空際に飛ばんとするが如く、自分は此日前の好風致に動かされて頻りに散歩を主張し、マカアも亦同意して自分に上靴を薦めたが、自分は冷かにセルギイが自分に腕を貸す故露に濕る憂はないと云て拒絶した。然るにセルギイは自分に腕を貸さぬから、自分は無理にセ

ルキイの手を執て、斯くして三人諸共に露を踏みしだきて行ッた。我が周圍の物景は悉く清く凉やかに、天地は澄渡ッてソヨ吹く風あるも塵來らず、草も木も何も彼も爽然として自ら形骸を忘れたる心地して徜徉する中、月は愈々冴えて自分はそッとセルキイを覗くと平生より一層氣高く若やいで艶やかに見え、恍惚としてじッと見る途端に、

『えッ………蛙が！』と號ぶ者があッた。

是はマカアの聲で、マカアは平日より蛙嫌ひであるが、ふッと足元を見ると、ゆッたりとした蟇が蹲まッて小さい蔭を地上に印した。

『恐がる事ァない』と渠は云ッた。

自分は思はず渠の顔を見上げた。渠は再び『恐がる事ァない』と云ッた。

如何云ふもンだか自分には『お前は可愛い』と云ふ樣に聞え、如何聞直しても『お前は可愛い——可愛い』といふ樣に聞えた。

暫らく散歩して頓てマカアの言葉に從て家に戻ッたが、セルキイは猶ほ歸らず、座敷で對座して種々雜多な浮世咄をしてゐる中、時計は午前三時を報じ一番鷄は三度鳴いた。

終にセルキイは暇乞をして例の通り言葉寡なであッたが、自分は既にセルキイを掌中に握ッた心地がしたばかりか、自分も何だかセルキイが慕はしく思ッたから、其一部始終を悉しくマカアに告げると、マカアも頗る滿足の容子で、自分と共に觀臺で色々の談合して、行末の事など語らひ、又今しも三人で散歩した仝じ道を再び徜徉して、此日に起りし一事一物を追懷し、セルキイの言葉を繰返して樂しんでゐた。

其夜到頭寢床に入らず、生れて初めての日出を拜み拂曉の景色を眺めたが、自分には何事も面白からで、唯胸一杯に充ちた疑問は何故セルキイは公然自分を愛すると云はぬかと荐りに案じ煩ひて、『何故そンなに難かしく思ふンだらう？』と心中に考へた、『折角好い機會があるのに何故口へ出さないンだらう？男が女を愛するッたッて好さゝうなものだ。若しあの人があたしの手を取て唯ッた一ト言あたしを愛するとさへ云て與れたら、それこそあたしは根こそぎ胸にありたけ打明けて仕舞ふが、さもなけりやァあの人の腕にかぢり附いて何にも云はないで泣いちまうけれど……しかし左うは思ふもの

みンなあたしが感ちがひでひよッとしたらあたしの想像が間違ッたのかも知れない。セルヤイはあたしに戀してゐないのかしら？』

と思ふと變な心持になつて、何だから、悲しくなつて涙に暮れた。が、燠窖に飛込ンだ時の事を考へると慥にセルヤイは自分を愛してゐるに相違なく思はれ、まだく充分に望がある如く考へられて、自分は跪きて神に祈請し一層セルヤイの爲め眞義を表はさうと決した。

雜録

○端午

馨子

目に青葉、杜鵑を聞く頃に、五月鯉の大空に躍へる勇まし。いでや曩に雛祭の事を記せしに因みて、端午の事の概略を掲ぐべし。偖端午には菖蒲を以て節物とする事、今は漸く衰へて僅かに菖蒲湯に名殘を留むるのみとはなりたれど、昔は家々檐に菖蒲蓬を葺き、菖蒲湯に浴し、菖蒲酒を飲むの例あり。又蓬にて作りたる虎を門前に掛け、柏餅を作り、幟を建つ。月令博物筌に蓬にて作る虎を門に掛て邪氣を拂ふとあれば、是等は皆暑中の邪氣を拂ふが爲めにや。今の生理に明らかなる眼より見れば、誠に兒戯にも似たるが如き思ひあれど、菖蒲蓬の香の高く深く、柏の色變へぬ目出度さを見れば、古昔の人の習慣にて是等を邪氣を拂の料に當てしも道理ぞかし。其外武器人形を飾り、菖蒲机藥玉を備へ、五色の糸を臂に掛けて騎射をなし、童は菖蒲打をなすなど、今は大方廢れ行きぬ。總て是等の風習は日本のみならず、支那にても同樣なること、清嘉錄といふ書に、五日俗に端五と稱す、瓶に蜀葵、石榴、蒲、蓬等の物を供へ、婦女は艾葉、榴花を簪し號して端五景となす云々とあるに就ても明瞭なるべし。今雛祭は女、端午は男の節句なるとを左に記すべし。

○男の節句

律人の句に「女の子いひ込めらるゝ幟かな」とあり。現や三月雛の節句に內裏親王五人囃子、偖は菱餅白酒など雛飾りの麗はしきに、女兒の喜び如何ぞや。此時男の心には世は只女の世となりて、日頃は妹よ女よとさげずみしには似もやらで、今日許りは何となく女の肩身廣く、我威勢鈍きに似てはと恨

めしく口惜しかりしが、忽ち端午の節句に逢ふて、旗幟勇ましく大空に鳴響き、さるは菖蒲刀の猛々しき、菖蒲打の晴やかなるなか〳〵女には及びもなきこと、雛の意趣返し此時と女子の言ひ込めらるゝ様、目に見るやうにていと床し。其外當歳許りの子の母の懐に抱かれて物のあやさへ能くは分かぬが、今日のみは相應しからぬ大幟の主人と敬はるゝも笑可し。總して我國は古昔より武事を尙びしこと、今更いふも愚なる次第ゆゑ、かゝる儀式にも幟吹流し又は甲冑などを飾り、殊に幟には鍾馗の圖を現はして勇威を示し、吹流しには鯉を翻へして、所謂鯉は瀧をも登るてふ靑雲の思を寄せしなるべし。斯る習慣なればこそ我日本には古昔より勇猛の士數多出でゝ此金甌無缺の國を無窮に守りしにて、一朝のわざくれながら無下に取捨つべき事にはあらずかし。今の世に幟吹流しも可笑しからねば、此儀式を今更永續さするには及ふまじけれども、此尙武の氣象だけは必ず捨つべからざることにて、人の母たるものには別して注意を要する所ならんか。

○幟の起原

光仁帝の時蝦古の賊來る、早良親王討手として出陣あり、親王伏見ふぢの森社に祈る、時に五月五日忽ち風吹て戰はずして勝事を得たり、端午の節に幟を立つるは此例なりと諸書に見ゆ、去れば此日幟を立つる事は中頃我國にて始まりしこと言を俟たず。今は幟も大方は家内に飾る玩弄物様のものとなりたれど、維新前までは武家の住む所などは、屋外に大幟を建てしこと人の知る如くなり。

○屈原の事

世人皆醉へり我獨覺むと轉じ浮世を三分五厘に見積りて、遂に汨羅の淵に投ぜし屈原が死亡の日は此端午の日なりとて支那にては屈原を祀るの例ありとぞ。去れど是は俗説ゆゑ眞僞は判しがたしと聞く。蓋し屈原は一種の東洋に流行せし厭世病の患者にして、只管浮世を淺間しく恨めしく情なきものに思ひなし、かゝる樂しからぬ世に露の身を置かんよりは、寧ろ汨羅の水に投して江魚の餌食となるの勝れるに若かずと、遂に一身を果したるもの、今日より見れば啻に賞賛の辭を與ふべからざるのみならず、甚だ厭ふべく悲しむべきの病者たるに過ぎずと雖も、其清廉潔白寸毫の私心なく、且文辭に長せし一種狷介の人たりしは敵ふべからず、後世此亞流の人に

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

重んせられ尊ばれて遂に端午の節に祀られしも故あることにこそ、偖又次に鍾馗は如何。

○鍾馗

世に勇猛の躰を現はせしもの多しと雖も、思ふに鍾馗に及ぶものはなかるべし爛たる其眼、參たる其鬚、藍袍の袖を卷て劍を按し、怒髮立て冠を衝く。其世に謂ふ鬼なるものを打つが爲めには、能くも畫き得たる意匠といふべし。清嘉錄に唐逸史を引て記せる所に據れば、明皇病に冒されて晝臥したまひし折柄、夢に藍袍の鬼一小鬼を從へたるが、頓て其小鬼を擘て食ふと見たまひけり。即ち夢の樣を吳道子に命じて畫かしめたまふとあり。此事若し實事ならば、鍾馗は明皇の夢に吳道子の意匠を加へたるものと知るべし。吳道子は古代無双の畫伯、宜なり其勇猛の躰を現はして遺憾なきことや。此圖を端午に掛くるは是亦邪を拂ふの意味にやあらんが、我國にては端午八男の節句となりたるより、彼雛祭の華奢やかにやさしく女らしきに並べて、端午には斯る勇猛剛毅の樣を現はすこと、偶然ながらよき取合せにして、男女の特性も差別も此飾物一ッに現はさるゝが如き思ひあるも面白し

田家のこよみ

畜勸子 編

○五月十五日より同卅一日迄農事

○小滿五月廿一日 ○蠶起食桑 ○紅花榮 ○麥黃蚕

○播種 豌豆、茶豆、黑豆、水潜豆、赤豆、甘藍、粟、稗、胡麻、續隨子、薑黑、等六月上旬まで播種してよし、

○揷木 木香、迷迭香、鐵線花、蒲桃、鳳火樹、巴戟天、杜鵑花、胡枝子花、萬年青、竹柏等揷して可なり、

○移植 水愁、椰、棕櫚、甘蕃、蜀黍、藤、江南竹、等此節より六月上旬迄に移植すべし、

○分栽 麥門冬、滾刀豆、鳳李等分栽してよし、

○接木 山茶、椿、月桂、菌桂、梔、接換して佳なり、

○雜事 此季節は農事最も多忙繁雜の時なれば深く心を用ひ、殊に蠶業の如きは手掛けさる仁過分の大仕掛は甚だ危險さ云ふべし。家禽は此季を過して孵化せしもの入梅の季多くは斃死すべし。

○園藝法

第九 嫁接法

異種異屬の砧木に接木するさきは、養液の環琉緩慢さなりて大に結果力を增進すべし、之を行ふには砧木は接種に比すれば稍や生長の遲緩なるを要す、然らされば接枝の甚だしく繁茂して果實を結ふを遲し、梨を榲桲砧に接ぎ甘柿を澁柿の砧に嫁するは其理是れなりさす、

第十 纒縛法

銅線或は鉄線を以て枝の礎部を纒縛し、結果を見るの后之を除去すべし。

第十一 裂枝法

幹或は大枝の礎部に於て、大枝或は小枝を裂き、其幹枝さの關係を斷つべし、此法稍や苛酷なるが如しさ雖ども、果木の結果に至るを早く、且つ一年を經ずして損傷部に皮肉を生して、再び幹枝の關係舊に復し、加ふるに枝容彎曲して美なる外觀を呈する等の利あり、殊に此法を苹果に施して好結果を得べし、

第十二 嫩芽摘除法

春季より夏季に至る頃、新芽發生后、其生長を待ちて其尖端を摘除するさきは、其生長を制限して結果を促すに効あり、獨り果木に止まらす、蔬菜の類に用ひて其利あるを見る、稻或は麥の類其生長盛に過るものは其葉先を摘除し、又は鎌にて豆類の葉先を截除し、或は鞭にて打が如き樣も此理に外ならす、

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

通信

淡海子編

●高知縣通信

◎製絲業　高知市内辛島紅塲、宮崎紅塲、村上紅塲の三箇處にては、此度横濱よりの注文續々あるを以て工女百名を募集せり、

◎師範女生　高知縣師範學校女生徒にして去る二十年より廿六年三月までの調査によれは、卒業生三十六名、退學十六名、女子高等師範學校入學四名、學資辨償退學一名なりと、

◎高知殖民會　武市代議士其職を辭し、本縣人百戸を石狩國樺戸郡月形村原野に殖民するの計畫に從事せらる、今移住民盟約中の二三を擧ぐれば、一協賛員の紹介を要すると、二金百五十圓以上を携帶すると、三移住后三ヶ年間禁酒の約を守ると、四慣習の休業を改め大祭日、日曜日を以て休業すると、五隣保相補の愛情と協同一致の信義を守り、他日の成功を期するものなれは猥りに轉住轉職せざると等なりと、

◎中村手藝傳習所　高知市中島町なる同傳習所へ創立以來入所せし女子の數近頃の調査によれは、高知市七十四人、土佐郡五十八人、安藝郡十四人、香美郡二十七人、長岡郡二十三人、吾川郡十三人、高岡郡十六人、幡多郡一人なりと、

◎婦人板垣伯を訪ふ　去る廿三日此度歸縣中の板垣伯に面會して教育其他婦人に關する談話を聽問せんとて、高知市近傍の教員及婦人實業會員、其他を合せて凡百有余名伯の寓所を尋ねられたりと、而して伯は數時間打くつろぎて談話せられたりときく、

◎入學女生　本縣高等女學校にては去る廿四日より入學試驗を施行されしが、合格者三十五名、志願者は四十三名なりし由、又合格者中成蹟の優等なる者は、二級生の補欠に充つるため其試驗を施行せられ、内十二名は二級生に編入せられたり、

◎ダウド嬢　前報せし如くいよ〳〵同孃は、去る二十五日發江州丸にて歸國の途に上られたり、

●鳥取縣通信

山陰の通信子

◎鳥取縣女子師範學校の出來事　先きつ頃同校の學年試驗を行ふ一週間前に當り、突然同學生中井タツ子(此回卒業すべき)は舍監より外出を禁ぜられ、きびしき取調べを受け、或る夜の如きは通宵舍監の前に喚び寄せて膝詰めの糺問に堪へ兼ねて氣絶せしも、翌朝漸く醫師の手當てをなしたる次第、又は親許及び其他の通信往復なと必ず點撿なす等、非常の折檻をなしたる末遂に逐校せられければ、一時縣下の一問題となり其父兄親戚よりは、師範學校長及び縣廳等へ逐校の理由を質問書等數通を出せしが、此時恰も臨時縣會開會中なりしを以て某議員の發言にて、縣知事へ逐校始末談判委員を擧ぐるに至りたれど未だ其如何の事由なるやを知ると能はず、或人校長(小早川潔氏)に向ひ兎に角に其始末を公然縣會に出でゝ辨明すべしと勸告せしものあれど、校長は之を否み最早其時機後れたりとし居れりとぞ、吾人が洩れ聞く所によれはタツ子或人より書籍を借りたる儘横領したりとか、又或る說には同窓生某子なるものと平生親み睦く某子は、タツ子に向ひ姉妹の約を結ばんとを申込みければ、タツ子は其親に相談せしに某子元と賤しき身にしあれば士族(中井氏)の身として斯るものと姉妹の約をなすは善からずと拒まれたりとの怨みを以て、タツ子寢臺の中に怪しき草紙を入れおきそが發見しての事なりとか、諸說紛々たれど何故か師範學校は之を秘して其始末を明かにせざるを以て、世人は益々疑惑を逞せり、將又縣會が質さんとする點は重もに其取調べの拷問に近く人權を侵害したりとの事なりとか、ツマリ此上如何に落着すべきか又もや報ずる所あるべし。

●福井通信

秋山貞二報

◎訓導　非職高等師範學校訓導田所いさ子は、福井縣高等女學校助教諭に任ぜられ、三級俸(四十圓)支給せらる、

◎賦金　此程發布されたりし本縣廿六年度豫算に仍れば、本縣の賦金は九千七百四圓にして、娼妓檢黴費は金千五百八十一圓九十二錢なり、

◎貸座敷　當縣下に於ける娼妓貸座敷免許地は、福井、三國、武生、蘆原、敦賀、丸岡、鯖江、大野、勝山、小濱、金津の十一ヶ所なりし

◎縣下の女學　當縣下の女學は一般に進歩の姿にて、女子の小學就學生も年々增加しつゝあり、縣立高等女學校の入學生は、從來福井市のもののみにして各郡よりの入學生は皆無と云ふべき程なりしに、本年は各郡よりの入學志願頗る多かりし、此れ一般に女子教育の必用を感じたるがためならん、

◎孝婦　今の世に珍しき一美談こそ聞き得たれ、福井縣敦賀郡愛發村杉箸の、中川次郎右衛門の妻リン(弘化二年三月生)は、仝村廊生口橋本三左衛門の三女にして、慶應元年二月次郎右衛門方に嫁し、克く貞節を守り姑に事へ未だ曾て一度も夫を怒らしたる事なく、其家固より貧なれば次郎右衛門は炭燒を業とし傍ら一反歩許りの田を耕作し、辛くも其日の活計を立て居るに、既に二男四女を擧げたれば益す其困究を增し、飯には菜大根を混合するは云ふ迄もなく、「リヨボ」なと云へる木葉までも交へて食するも、母キクには聊か斯る麁食を供せず、母キクは十年前眼病に罹り盲目となりしかば爲めに盡すと一層を加へ、次郎右衛門は日々山に入り炭燒を業とすれば己れは田畑に出でゝ耕耘の業を執るも、老母をして一人家に居らしむる事なく、必ず之に看護を附け置き其用を辨ぜしめたり、又該村は郡内一等の寒地なれば、本年の如きも積雪丈余に至りたるが、老母には火箱を與へ暖を取らしめ、猶其寒からん事を恐れ、己れ其傍に臥して身以て之を暖め、其淋しからん事を恩ひて、一家團欒して其邊に臥さしむ、又キクは本年八十八歲の高

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

齢なるに、携て加へて盲目なれば歩行も自由ならざるゆへ、出入毎に必ず背負ひて看て歩ましめず、說教などある毎に數里の遠きも必ず背負ひて參詣せしめけりと、事官に聞ゆ則ち左の褒賞を與へて旌表したり

福井縣越前國敦賀郡愛發村大字杉箸中川治郎右エ門妻

橋　本　り　ん

資性篤實幼にして父を失ひ母に事へて至孝慶應元年二月中川治郎右エ門の妻となり爾來貞操を守り克く其姑に事へて孝養怠らず茲に二十有八年志行一日の如し洵に奇特とす依て爲其賞金貳圓五十錢下賜

福井縣知事　　孤　川　邦　職

●三重縣通信

◎「レズナ」孃　四日市基督教會の「レズナ」孃は病氣のため、播磨須磨地方へ轉地療養として三四ヶ月間滯在せらるゝ由にて、通譯駒井女史と共に關西鐵道に乘し出發せり、尙ほ毎月一回づゝは來港せらるゝよし、前號に神戶に移住せらるゝと記せしは誤載、

◎四日市婦人禁酒會員　四日市婦人禁酒會員こたび會員へ洋銀製の證票を贈與せり、會員は常に之を胸間に懸けて會員たるを明にする由、

◎女生徒の脩學旅行　津市養正高等小學校生徒三四、年女生徒五十餘名は、三重朝明教育展覽會縱覽のため受持教員之を引率し、去る二十六日四日市に展覽會を縱覽し併せて三重紡績會社の器械運轉を一覽して歸校せり、

◎工女の撿査　三重紡績會社にてはこれまで無撿査にて工女を抱へ來りしが、今度視力及び肺量等を撿査の上ならでは雇ひ入れざることに定めぬ、

◎養正高等小學校卒業女生徒　こたび養正高等小學校を卒業せし女生徒は僅に七名にして、皆養正同窓會に入會せり、

●宮城縣通信

◎郡司大尉一行への傳導　東北救世軍隊員高橋傳五郎君は、救世軍附屬の貧民學校の成人せる貧民に熱心傳道せられつゝありしが、今回郡司大尉一行に加はり、一行にキリスト教を傳ふる志願にて北征せらるゝとはなれり、仙臺の信徒は此擧を賛成し義捐金を募りしに、其金額十七圓以上に達したるも、尙は其不足とし て仙臺日本キリスト教會の婦人義捐會にては、數年來貯蓄し來れる金額八十五圓を千嶋傳導費に當てんとて之を同氏に贈られたり、

◎岩沼教會　同會は以前より婦人會ありたるも、近頃は訓導西淵氏の盡力により益々奮えり、同會には基督教を嫌ふ婦人も來會するとふ、

◎小平たか子女史　信徒なる同女史は仙臺より岩沼小學校に招聘せられ、裁縫を教授せらる尙ほ好果を結ぶに至るべし、

◎郡司大尉の一行　は本縣に於ては非常に歡迎せられ、之か爲め殆と狂するか如き有樣なりと云ふ、

女報

淡海子編

●貴夫人參內　各大臣有爵夫人は、去四日午前十時頃より參內　皇后陛下の御機嫌を伺ひたり、

●女子師範學校の服制　女子高等師範學校にては、此度其制服を日本服となしたる由なるが、右は前文部大臣の時全校長に制服一定の取調を囑托したるに未だ取調濟とならざるを以て、右取調濟迄日本服を以て制服となし度旨、井上文部大臣に伺出で、同大臣より認可の指令を與へたるにて、全く洋服を禁じたる次第にてはこれなしと云ふ、

●大日本婦人教育會　同會は去る廿二日鹿鳴館に於て例會を開き、築地別院の布教者小野島行薰師日本女子と云ふ演題にて一場の演說を爲したり、當日は總裁閑院宮御息所、會頭毛利公爵夫人を初め高貴の夫人令孃數多出席者ありしと云ふ、

●喫茶店　米國シカゴ博覽會の佛國出店に係る、コーヒー店には多くの美人を置く由にて、我邦の出店に係る喫茶店にも、日本の美人二三名を供へ置き度旨、渡航委員より茶業組合中央本部へ申越したるに付き、目下美人撰定中なりと、其美人と云へるには如何なる婦人を云へるにや、

●山田幹子女史　は明治女學校にあられたるが、彰榮女學校の教師として、過日着崗せられたり。仝女史は信仰厚く、溫良の性なれば生徒も喜び居るよし。又敎會の爲めにも漸々働かるると。

●彰榮女學校　は去月五日より其業を始めたり。本學期に入學せしもの六七名あり、漸々增加の有樣なりと(以上二件自由基督教雜誌)

●澁澤榮一氏と市參事會員　東京市の養育院は有志の義捐金を以て設立し、貧家の子弟を教育する處にして、同院長は市參事會員をして之に當らしむるの規定ありて、澁澤榮一氏が久しく此任に在りしが、今度の改撰に際し、同氏が市參事會員の撰に洩たるに就ては勢、此任を他人に讓らざるべからず、元來敎育院員は前記の如く廣く有志者の義捐金より成立せるものなれば、此任に常る人は朝野の貴顯紳士間に交際廣き人にあらざれば、有志者を勸誘して多額の金圓を義捐せしむること能はず、從て同院の盛衰にも關係する次第なるが、澁澤氏は此道に掛けては最も適當の人にして、同院が今日の盛大を見るに至りしも、氏の力預て大なれば差詰め新撰の參事會員中より其欠を補ふことは困難なりとて、同會員及市會議員中には氏が撰に洩れたることを惜むもの多く、就ては近衞篤麿公の補欠撰擧には、氏を推さんとするもの多かるべしと云ふ、

●婦人の吸烟室　林董氏の園遊會の節、主人の注意にて二階の一室を婦人の吸烟室と爲し、爰に數十本の長烟管を備へ、日本の貴婦人にして煙草を嗜む人の爲め

に、特に日本煙草の馳走を爲したりしに、草煙好の貴夫人連中は何れも主人の注意の行屆けるに感心し、悅んで數服を試みしと云ふ、思ふに西洋にては表向き婦人は吸煙せざる者と定まり居れば、宴會などの節にも婦人の爲めに、特に吸煙室を供へずして別段差支なきことなれども、平生煙草を呑み慣れたる日本の貴婦人は、西洋流の宴會に招かれ煙草を呑むこと叶はずして非常の苦を感ずること、多し、國異なれば習慣同じからざるは當然のことなれば、日本にて夜會園遊會などを催すときには婦人の爲めに吹煙室を設けて毫も差支な答きなりと、或人の話（五月三日時事新報）

●婦人共立育兒會　同會は去廿五日開會の豫定なりしが天氣惡しきが爲め順延去廿六日午後一時より小石川砲兵工廠內後樂園に於て開會したり、來會者は有栖川宮妃殿下、會頭鍋島侯爵夫人を始め無慮八百餘名何れも朝野の貴賤を問はず、慈善有志の婦人方にして、府下各區に分ち各幹事あり夫々周旋し、柵橋夫人の演說あり餘興には手品、八雲琴、淨瑠璃等あり特別招待の紳士には折詰ビールの饗應、會頭夫人の挨拶等ありて中々の盛會なりし、聞く同會は去る明治廿四年五月に創立し、同年は二十八名、翌廿五年は五十五名、本年は今日迄二十四名の貧兒を撫養育生し、現今入院し居るもの、十二名ありて(育兒は十四才迄を限ると云ふ)此日も來場し機嫌克遊戲し居たり、同會員婦人は目下二千餘名の多きに及べりと云ふ、

●故カロイン、カルクス夫人の埋葬式　故同夫人の棺柩は、去る廿二日午前八時自邸より聖安得烈會堂に送られ、堂の中央に安置せられ內外貴顯紳士の贈花を以て見事に飾られたり、同日午后一時半國語の拜式あり、會長山縣與根二、仝吉澤直江二氏之を執行す、畢て會衆は皆聖安得烈學院講堂に控へたり、午后三時に至り英語の禮拜式あり、アーチデヤコノ、ショウ氏、會長フランシス氏之を司り、共に列席したるものには、會長ペーヂ、仝キング、仝チヤモレー、仝ライド、仝パットン、仝フリーズ、仝ガードナー、仝山縣仝吉澤會東山田の諸氏、及ひ謳歌者十數、また會葬者中には內外貴顯紳士令夫人、若干凡て二百人以上ありて、大山伯及び令夫人、西鄉伯令夫人、三宮式部長、外國人には非職監督ウヰリヤムス氏以下數十人あり、會堂內の式畢て教職謳歌者は禮服のまゝ進行すれば、棺柩は門內まで內外貴顯紳士にかゝれて堂を出で、一同門前に整列し青山墓地に至り式の如く埋葬す、此日送葬の馬車數十人力車百輪觀者路に群をなし頗る盛式なりき（日曜叢誌）

●醜業婦茶箱に潜みて渡航す　婦女の醜行はさることながら、種々の方法を以て勸誘し購入する者の心根ほど惡むべきはなし、居留地警察署に令して渡航者の取締を嚴重にせしめたるが、法嚴なれば之を脫する術亦た巧みなり、彼等は巧謠なる陰秘なる方法を以て、無智可憐の少女を渡航せしむること中々止むべきにあらず、昨日午前十時桑港に向け横濱を解纜したる、米國郵船リヨヂヤチロー號に積みたる空茶箱に醜業婦女四五名を入れ、私かに渡航せんと企てし者ありしが、横濱居留地警察署に於て探知し、本船出帆の際搭載貨物に就て嚴重に取調べしも遂に見當らずして止みしと云ふ、婦人は固より無智辯口に欺瞞せらるゝ者多し、唯た其の間に立ちて周旋する者を嚴重に處分するより外あらじ、此等の業を營む者は外國船と密約をなし、治外法權下に隱る者尠からずと聞く、醜業婦女子を誠服するより斯の如きは十分の搜査をなしもし之を發見せば、外國人なりとも外國船なりとも假借するなく、嚴重に處分せざるべからず、外人を畏敬することそ彼等の乘ずべき弱點なれ（日本）

●ゲーンス女校長　神戶なる幼稚園の女校長ゲーンス孃は、斯道に熱心の聞え高き人なるが、此度び万國博覽會の節開くべき幼稚園大會議の委員に擧られたれば今度一旦歸國して之に臨み且つ一年半間滯在して一層斯道の事を調査し、再び渡來せらるべしと也。其不在中は、兼て米國に留學して幼稚園の學を學び目下廣島幼稚園を管理せらるゝ甲賀ふし女子が代理せらるゝ由なり。

●子守教育部設立　靜岡縣賀茂郡岩科村岩科區にては學齡者の就學猶豫を出願する多きを以て、其理由を調査せしに、右猶豫を出願するものは悉く中等以下農家の子弟にし就學の年齡に達したるも入學せしむる時は生計上に差支を生ずるを以て、父兄の手傳びかた〳〵子守をなさしむる故入學せしむる能わずとの事實判然したれば、去廿三日の同區會にては子守教育部を設立する事を議決し、教科課目は讀書算術、修身、習字等にして修學年限三ヶ年と定め、一週の授業時間は十五時間の見込なる由、

●有望の女教師　久米南條郡第三番學區尋常龍山小學校訓導、藤原千代孃には去る明治二十三年岡山尋常師範學校を卒業なしてより、同小學校に奉職し今日に至る迄四年の長日月一日の如く熱心に着實に子弟を撫育し、子弟は爲めに慈母も啻ならざる程にて、人望尤も宜しかりしに、此度都合に依り弓削小學校に轉勤するとの說起るや、村民の失望一方ならず、或は留任を勸告するも有り、或は俸給増額の議起り、偶々村會の開設あるを機とし、村長は議場に謀りしに終に一圓の増額となりしなど、人民の囑望如斯なるも事情止を得ざるに出で如何とも爲す可らざるより、去る十三日終に送別の式を擧るに至りたり、其の概略は村長立つて仝訓導が轉勤の理餘余議なくせらるゝ次第を述べしかば、並居る子弟は固より父母に至るまで、其の演說中過半は涙に咽ばざるものなかりしと、式全く終り其れより仝校生徒十一名は、藤原訓導の歸路二十餘町程見送りを爲し、名殘を惜しみて歸へりたりと云ふ、因曰村長は仝訓導に向け特別慰勞として金二圓五十錢を給與し、有志者八十九名よりは、感謝狀に錦帶地を添へて贈りたりと、嗚呼教員たる者斯く有りてこそ眞に弟子を教育し得べきなり、

●高等女子師範學校廢止說　高等女子師範學校は、各地方師範學校女子部の女教師養成の場所なれども、近來地方議會に於ては續々女子部を廢するの議を決する者ありて、年を逐ふて其數を減ずるに至るは必然なれば、最早三万四千六百七十餘圓の經費を支出して、高等女子師範學校を存し置くの必要なしと聞く、

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

櫻井明石君譯

希臘孝子腓立比物語

大形洋綴美製
正價金卅五錢
郵稅　金六錢

今を距ると六十年希臘國の勇士等、土耳其國の壓制に堪へず義兵を擧げたりし時、一方の將となりたる、メサロスなるもの戰敗れて、其妻と共に奴隷に賣られて、遠くアラビヤのバグダッドへ連れ行れて、苦役に服しをり其子腓立比其時六才なりしが、或人に養育せられて十七才に至りたる時、土國より遣はされたる管領の危難を救ひしが緣となり、管領腓立比の至孝勇猛を感じて莫大の金を與へ、船を用意させて兩親を贖ひに出しやり、船中にて腓立比は船長の危難を二度助け又船長の助言により腓立比基督の信徒の身を以て、土國マホメット宗徒の假裝を爲して、單身にて隊商の群に加はり愈アラビヤの沙漠に乘り込み、沙漠中にて其基督教徒なると露見し殆ど生命も危かりしを、隊商の頭領其至孝と堅信とに感じて、大に腓立比を省みるに至り、後又隊商等がアラビヤのベドウィシ族に剽掠せられ囚虜となりし時、腓立比も亦囚人となり、爾後幾多の艱難變遷ありて、終に酋長腓立比の志に感じアラビヤの健兒に護送させてバグダッドへゆるし遣り、バグダッドにて非常の困難に遇ひ大失望したりしも、圖らぬ助けを得て遂に兩親を奴隷苦役の中より十二年目に芽出度救ひ出しぬ。

朝野新聞の評　櫻井明石氏重譯　希臘孝子腓立比物語

是れ記者が三年の歲月を閲みして經營慘憺の閒に成れるもの宜なり卷中の人物躍如として其の眞を顯はし一讀の下人をして感憤激勵嗚咽の情に堪へざらしむるや、飜りて想ふ我れの國を建つる玆に三千年其の間忠臣あり義士あり烈婦あり貞女あり善く世道の澆季を拒きしや今や人心維れ危く道心維れ微なり想ふて玆に至れば余輩豈に感慨なきを得んや」女學雜誌社主は道德卓行の士なり。滔々たる天下輕薄是れ追ふの時に於て彼れは獨り万斗の熱涙を灑いて世の信仰ある德義あるの士女に同情を表せり而して今此孝子の贖を梓して世に行はんとす彼れの意を用ゆる深しと云ふべし

發行所　東京市下六番町六番地　女學雜誌社

發賣　東京市出雲町　警醒社書店

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

基督教新聞

第五百十一號　五月十二日發行

○社説
教育と宗教に就て
○教報
拾數件
○海外事情
英國教會の寄附金○其他數件
○通俗宗教談
罪惡　容膝堂主人
○雜錄
獨逸神秘神學○唯願くは猛火とならん○和歌及詩
○寄書
姓名御披露　第五回夏期學校の關係委員
○批評
教育と宗教の衝突に付きて○三籟○布哇革命小史

定價表	郵税共
一部金貳錢五厘	金三錢
三ヶ月金卅一錢五厘	金三十八錢
半ヶ年金六十錢	金七十三錢
一ヶ年金一圓十四錢	金一圓四十錢

發行所　東京本鄉東竹町三十四番地　警醒社

六合雜誌

第百四十九號　五月十五日發行

定價金八錢半ヶ年金四十三錢一ヶ年金八十錢

○現今道德界の一大欠亡　横井時雄
○敢て元勳諸公に人生の覺悟を問ふ　松村介石
○歸朝後のヂエンス先生　浮田和民
○近代獨佛に於ける社會學の沿革　ドクトルオフフィロソヒー家永豐吉
○元良大西二君に答ふ　三宅雄次郎
○基督教に關する一卑見　朝河貫一

新刊批評○井上圓了氏教育宗教關係論○内村氏コロンブス○貞方氏、ウヱリス傳○丹羽氏ヘンリー、マーチン○松村氏、我黨の德育、三籟

發行所　東京本鄉東竹町三十四番地　警醒社

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

裏錦

第七號（五月十五日發行）要目

おひたちの記

トゥストイ著
林　丘子譯

本篇は、幼年、成童、少壯の三成育期に區分して編次せしものにて、露國の文豪伯爵トゥストイ氏の傑作と稱す。其人生の成立を心理上の觀察に愬へて人間性情の理想を寫實的に叙述したるは、以て氏の心理小説家たる特色を見るべし。今我裏錦は、本號より、逐次これを譯載して、讀者に紹介する所あらんとす。其文情醞釀、溶溶として息まざるが如きは、篇を累ね號を重ねて、これを味ふべし。

◎幼年篇　第一回（師傳カル、イワーノウヰチ）本號掲載

藤架下の偶筆（社説）母の膝（殘夢生抄譯）孤女學院を訪ふ（五子）僞皇子（プシキン著殘月庵譯）詩人の天地（殘月）模型人體（白菊）觀舞樂（路内五子）壽日本女學史（さくらごの翁）

發行所　東京神田區駿河台北甲賀町十三番地　尚絅社

大賣捌所　東京神田區表神保町三番地　東京堂

全國の兄姉諸君に謹告す

時下春風浩蕩として蝶舞ひ鶯歌ふの候に際し候處諸兄姉主の聖恩に依りて益御清榮に可被成御起居奉拝賀候陳は諸新聞紙上にて御承知相成候如く全國福音同盟會は愈よ本月廿四廿五日の兩日を期して我名古屋市に開設せられ候由我儕の深く感謝して其の當日を相待ち候事一日三秋も啻ならさるの思いたし居る所に御坐候就ては我儕が主に在りて敬愛する諸兄姉の雲の如くに賑はしく御來會被成下候て折角開設せらるべき同盟會に大なる光彩を添へ玉はん事を切に熱望仕候仍て甚だ略義ながら寸楮を以て御案内迄早々言上仕候願くは全能の主恩寵の手を垂れ玉ふて兄姉諸君を祝福し且誘導して此の會に列席せしめ玉はんことをアーメン

廿六年五月

名古屋基督信徒一同謹白

二伸　御來會相成るべき御人員本月二十日までに名古屋市長塀町百八番戸細川瀏氏宛にて御一報被成下度併せて冀望仕候

信南日報ハ天利地利人和ヲ得テ起ルモノニシテ其主義不偏不儻進ソテハ我國權ヲ海外ニ發揚シ退テハ地方的利害ヲ討論ス

信南日報ハ政治海ノ羅針盤實業界ノ案内者トナリ政治法律、經濟、農工商幷ニ文學、技藝等ニ關スル時事問題ヲ掲載シ常ニ商況物價ノ正確ナル者ヲ報導ス

信南日報ハ五月廿日ヲ以テ初號數万枚ヲ印刷シ廣ク各地ヘ頒布ス故ニ其紙上ニ掲載スル廣告ノ効驗ハ偉大ナリ登載希望者ハ來ル五月十日迄ニ御申込相成度候

信南日報ハ毎日發刊定價一枚金八厘壹ヶ月金廿一錢半年分壹圓十四錢壹年分貳圓十六錢外ニ郵税一ヶ月十三錢廣告料五號活字廿二字詰一行一日金七錢二日六錢五厘三日以上六錢五日以上五錢彫刻テ要スルモノハ其料ヲ申受ク代金拂込ハ飯田郵便局宛郵券代用一割増總テ前金ヲ要ス

發行所　長野縣下伊那郡飯田荒町　信南日報社

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

巖本善治編

吾黨之女子教育

小形二百十七ペーヂ
定價郵稅共金拾錢

「吾黨の女子教育」成る。巖本善治君の演述又は起草に係るものを編せしものにして、本校教育の精神、期圖、大率ね之に同じく、現今實施する所ろ亦之に異なることなければ、此書亦用ひて「吾校の女子教育」を代言するものと謂つべし。故に、君と計り、吾校之を版にして、世の同志に示すことゝす。

全部十五章

明治女學校生徒に告ぐ……一
目下の女子教育法……一
何をか中正の旨義と云ふ……三十
女子教育に關する幾多の謬見……三十
女學及女子教育……五十四
母妻論……六十四
女學に反對する者の言論……八十四
日本女學讀本編纂……九十二
女禮と躰操……百
上躰操……百
下女禮……百五
女學校の裁縫科……百十二
塾舍に三の法あり……百二十二
武道の辨……百二十二
老母に代つて女學生へ苦情……百五十
細君內助の辨……百五十九
當今女子教育者の胸臆……百九十七
女學普及の經綸……二百〇七

發行 東京下六番町六番地 明治女學校
發賣 同 女學雜誌社

林學士星野愼之輔君著

昆蟲 植物 金石 採集法

正價金八錢
郵稅金二錢

昆蟲界
昆蟲分類
昆蟲變態
採集地
採集注意
採集器
貯蟲法
刺針法
昆蟲運搬法
幼虫類飼育法

植物界
葉とは何
花とは何
枝とは何
植物南
採集すべき部分
採集氣節
採集器具
乾腊法
標本製造

金石界
金石分類名稱
金石の現出
識別鑑定法
岩石の現出
土性の現出
土性分類名稱
土性分析法
採集器具
採集法方

麗かなる新綠の野外に杖を曳きし時、諸子は可憐なる蛺蝶を見て何かに感ぜしか、凉しき樹陰の溪流に沿ひ遠足せし時、諸兄は美麗なる昆蟲を觀て何かに感ぜしか。之を採りて直に納め、坐右に博物館を開きて友を延き、一は天の美を樂み、一は研究の好材料とせんとするならん、之を以て散策一層の樂み深し、多愛なる諸友よ予が採集を講ずるは、蓋し割愛耳云々之れ著者の言なり

發行所 東京市麴町區下六番町六番地 女學雜誌社

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

文學界

第四號要目 四月廿九日發行

明智光秀　殘花
八世の風流を懷ふ　枇杷坊
對花小錄　脫蟬
對茶寂話　暗光盧主
花幻　棲月
暮れ行く春の姿を惜む　禿木
筆のすさび、聞けること　花圃
彙報
涙六茶屋○新刊書籍○書籍紹介
英詩評釋
グレー氏春の歌　孤洞主
附錄
兼好法師家集
阿佛乳母の文

定價表

	東京市內	地方郵稅共
一冊	六錢	八錢
六冊	卅三錢	四拾五錢
十二冊	六拾錢	八拾四錢

發行所 東京麴町區下六番町六番地 女學雜誌社
大賣販 東京堂◉武藏屋◉東海堂◉便利堂

農科大學出身星野愼之助君編

應用植物編 (附)詩經植物類考

正價金四拾錢　郵稅六錢
二百三十頁　クロース製本
四月十四日出版

右は君が大學々窻にありし時自から便に供せんとて編み置かれしもの、此頃某校教授上の必要より印刷せられんとするを乞ふて出版せり、之を一見するに便利なる有用植物索引書とも言ふべく、明亮なる有用植物の戶籍とも言ふべく、殊に凶年に食し得べきもの、藥用のもの、有毒のもの、牧草用のもの、纖維用のもの、其他種々の用に供すべきものを一々明かにして其性質形狀などを掲げ、澱粉纖維タンニン等の製法を示す、而して索引表ありて容易に之を探ぬるを得るなど親切至れり、其分類撿定表、各科植物特徵表、材木有害灌木利用表の如き、最も便を盡す。就中詩經植物類を務めて翻譯し支那の歌草詩花を明かにせし如きは文學の範圍に關する所少しとせず。要するに植物學を學ばざる者も又農家にも一本を備へて便利言ふべからざるものなり。

發行所 東京麴町區六番町六番地 女學雜誌社
發賣所 日本橋區通三丁目十四番地 丸善商社書店
賣捌所 ◉瑞穗屋◉警醒社◉東京堂◉中西屋◉有隣堂◉小林

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌(第三百四十四號)(明治廿五年三月十五日)遞信省認可(明治廿六年五月十三日發兌

久津見息忠君著

耶蘇教衝突論

右ハ、多年名ヲ潜メテ、専哲學ニ研究シタル、蕨村居士、久津見息忠氏ノ著ス所。井上博士ノ說ニ對シテ、教育ト耶蘇教トノ關係、耶蘇教ノ利害等ヲ論シタル者。所見卓拔、條理明晰。居士ガ、懷抱セル理想ヲ詳悉シテ、痛快ナル斷定ヲ下シタリ。宗教家、教育家ハ、必一讀セザルベカラズ

○全壹冊定價金拾六錢郵稅金貳錢
○五月五日發賣

發賣所 女學雜誌社 東京麴町區下六番町六番地

大取次 ●警醒社 ●東京堂 ●東海堂 ●寶山堂

巖本善治君講述

教育學講義

正價金八錢
郵稅金貳錢

右は君が、明治女學校、高等科女生に口授せられたる講義中、之を筆記して、昨年七月より本年四月に至る、白表女學雜誌附錄として、續載せしものにして、先頃より之を一册子として世に公にせよと請はるゝ者あれば。謂ば君の未定稿なれど、今般廉價を以て同好諸君の求めに應せむとす、

發行所 東京麴町區下六番町六番地 女學雜誌社

女學雜誌代價		
六册(半年)	前金三十五錢	府外三十八錢
十三册(一年)	同七十三錢	同七十八錢
廿六册	同一圓三十錢	同一圓四十三錢
一册	金六錢 郵稅	金五厘

雜誌及び書籍代金二十錢未滿は郵券代用不苦候、郵券は五厘切手一割增の事
雜誌及び書籍代金通運便にて御送付の向は屆け賃さも濟にて御送付相成度候

明治廿六年四月廿五日內務省認可
明治廿六年五月十二日印刷
明治廿六年五月十三日發行

發行兼編輯者 東京市麴町區下六番町六番地 巖本善治
印刷者 東京府南豐嶋郡千駄ヶ谷村元原宿村百五十九番地 堀口庄三
發行所 東京市麴町區下六番町六番地 女學雜誌社
印刷所 仝牛込區市谷加賀町一丁目十二番地 秀英舍工場 (電話十九番)